

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 福岡財務支局長

【提出日】 2019年6月27日

【事業年度】 第108期(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

【会社名】 株式会社福岡銀行

【英訳名】 THE BANK OF FUKUOKA, LTD.

【代表者の役職氏名】 取締役会長兼頭取 柴 戸 隆 成

【本店の所在の場所】 福岡市中央区天神二丁目13番1号

【電話番号】 092(723)2131(代表)

【事務連絡者氏名】 総合企画部長 藤 井 雅 博

【最寄りの連絡場所】 福岡市中央区大手門一丁目8番3号  
株式会社福岡銀行 総合企画部

【電話番号】 092(723)2622

【事務連絡者氏名】 総合企画部長 藤 井 雅 博

【縦覧に供する場所】 株式会社福岡銀行 東京支店  
(東京都中央区八重洲二丁目8番7号)  
(注) 東京支店は、金融商品取引法の規定による縦覧場所ではありませんが、投資者の便宜のため縦覧に供する場所としております。

## 第一部 【企業情報】

### 第1 【企業の概況】

#### 1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 当連結会計年度の前4連結会計年度及び当連結会計年度に係る次に掲げる主要な経営指標等の推移

		2014年度 (自2014年 4月1日 至2015年 3月31日)	2015年度 (自2015年 4月1日 至2016年 3月31日)	2016年度 (自2016年 4月1日 至2017年 3月31日)	2017年度 (自2017年 4月1日 至2018年 3月31日)	2018年度 (自2018年 4月1日 至2019年 3月31日)
連結経常収益	百万円	171,513	180,180	184,190	183,677	195,682
うち連結信託報酬	百万円	1	1	1	0	0
連結経常利益	百万円	60,111	71,947	64,897	62,302	73,738
親会社株主に帰属する 当期純利益	百万円	40,272	49,846	47,963	44,044	53,655
連結包括利益	百万円	73,885	46,624	50,718	72,603	19,900
連結純資産額	百万円	580,636	610,738	646,170	700,941	700,493
連結総資産額	百万円	12,146,362	12,981,607	14,647,264	16,779,450	17,409,736
1株当たり純資産額	円	784.63	825.32	873.25	947.27	946.67
1株当たり当期純利益	円	54.42	67.36	64.81	59.52	72.51
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益	円					
自己資本比率	%	4.77	4.70	4.41	4.17	4.02
連結自己資本利益率	%	7.26	8.36	7.63	6.53	7.65
営業活動による キャッシュ・フロー	百万円	933,695	280,041	1,095,691	1,068,692	127,018
投資活動による キャッシュ・フロー	百万円	422,229	151,552	90,461	75,455	214,201
財務活動による キャッシュ・フロー	百万円	36,930	74,023	17,215	17,832	40,348
現金及び現金同等物 の期末残高	百万円	1,292,299	1,346,679	2,334,674	3,460,957	3,507,817
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	4,570 [1,558]	4,620 [1,595]	4,680 [1,649]	4,666 [1,661]	4,641 [1,642]
信託財産額	百万円	332	326	319	313	305

- (注) 1 当行及び国内連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。  
2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益は、潜在株式がないので記載しておりません。  
3 自己資本比率は、(期末純資産の部合計 - 期末非支配株主持分)を期末資産の部合計で除して算出しております。  
4 連結株価収益率については、当行は上場していないため記載しておりません。  
5 平均臨時従業員数は、銀行業の所定労働時間に換算し算出しております。  
6 信託財産額は、「金融機関の信託業務の兼営等に関する法律」に基づく信託業務に係る信託財産額を記載しております。なお、連結会社のうち、該当する信託業務を営む会社は当行1社です。

## (2) 当行の当事業年度の前4事業年度及び当事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次		第104期	第105期	第106期	第107期	第108期
決算年月		2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
経常収益	百万円	161,405	171,324	172,772	172,045	182,749
うち信託報酬	百万円	1	1	1	0	0
経常利益	百万円	58,990	66,806	60,105	57,009	68,762
当期純利益	百万円	36,302	45,611	44,150	40,428	50,308
資本金	百万円	82,329	82,329	82,329	82,329	82,329
発行済株式総数	千株	739,952	739,952	739,952	739,952	739,952
純資産額	百万円	556,757	599,328	626,787	664,594	670,020
総資産額	百万円	11,535,348	12,363,414	14,006,440	16,096,182	16,710,503
預金残高	百万円	8,831,796	9,158,129	9,641,386	10,183,104	10,447,178
貸出金残高	百万円	7,763,337	8,260,640	8,925,392	9,512,046	9,897,843
有価証券残高	百万円	2,233,085	2,416,715	2,453,539	2,394,706	2,149,257
1株当たり純資産額	円	752.42	809.95	847.06	898.15	905.49
1株当たり配当額 (内1株当たり中間配当額)	円 (円)	22.10 (10.90)	22.80 (11.10)	23.00 (11.50)	25.60 (12.60)	30.00 (14.50)
1株当たり当期純利益	円	49.06	61.64	59.66	54.63	67.98
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	円					
自己資本比率	%	4.82	4.84	4.47	4.12	4.00
自己資本利益率	%	6.77	7.89	7.20	6.26	7.53
配当性向	%	45.04	36.98	38.54	46.85	44.12
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	3,622 [1,084]	3,682 [1,207]	3,724 [1,238]	3,721 [1,256]	3,718 [1,237]
信託財産額	百万円	332	326	319	313	305
信託勘定貸出金残高	百万円					
信託勘定有価証券残高	百万円	298	298	238	129	129

- (注) 1 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。  
2 第108期(2019年3月)中間配当についての取締役会決議は2018年11月12日に行いました。  
3 潜在株式調整後1株当たり当期純利益は、潜在株式がないので記載しておりません。  
4 自己資本比率は、期末純資産の部合計を期末資産の部合計で除して算出しております。  
5 株価収益率、株主総利回り、比較指標、最高株価及び最低株価については、当行は上場していないため記載しておりません。  
6 平均臨時従業員数は、銀行業の所定労働時間に換算し算出しております。

## 2 【沿革】

1945年3月	福岡県下に本店を置く株式会社十七銀行、株式会社筑邦銀行、株式会社嘉穂銀行及び株式会社福岡貯蓄銀行が戦時下における政府の方針に即応して1945年3月解散合併し、株式会社福岡銀行を設立(設立日：1945年3月31日、資本金：25,000千円、本店：福岡市)
1949年6月	福岡証券取引所に上場
1951年4月	外国為替業務取扱開始
1976年10月	福銀ビジネスサービス株式会社設立(現 福銀事務サービス株式会社)(現 連結子会社)
1978年6月	福岡信用保証サービス株式会社設立(現 ふくぎん保証株式会社)(現 連結子会社)
1978年10月	東京証券取引所及び大阪証券取引所市場第二部に上場
1979年10月	福岡コンピューターサービス株式会社設立(現 連結子会社)
1980年7月	担保附社債信託法に基づく受託業務認可
1980年9月	東京証券取引所及び大阪証券取引所市場第一部に上場
1990年5月	新オンラインシステム稼働
1994年1月	信託業務取扱開始
1998年12月	証券投資信託の窓口販売業務開始
2000年1月	株式会社広島銀行との間で「共同利用型基幹システムに関する最終合意書」を締結
2000年3月	福銀不動産調査株式会社設立(現 連結子会社)
2001年4月	損害保険商品の窓口販売業務開始
2002年1月	当行の「共同利用型基幹システム」が先行稼働
2002年10月	生命保険商品の窓口販売業務開始
2003年1月	福岡銀行・広島銀行の「共同利用型基幹システム」の本格稼働
2003年5月	ふくおか債権回収株式会社設立(現 連結子会社)
2004年12月	前田証券株式会社(現 FFG証券株式会社)の株式を追加取得し、持分法適用関連会社とする。
2005年5月	証券仲介業務開始
2007年3月	株式会社福岡銀行上場廃止
2007年4月	株式会社福岡銀行と株式会社熊本ファミリー銀行(現 株式会社熊本銀行)が、共同株式移転により親会社「株式会社ふくおかフィナンシャルグループ」を設立するとともに、同社の株式を東京証券取引所、大阪証券取引所、福岡証券取引所に上場。当行は、「株式会社ふくおかフィナンシャルグループ」の完全子会社となる。 (その後、2013年7月大阪証券取引所は東京証券取引所に統合)
2007年10月	親会社の「株式会社ふくおかフィナンシャルグループ」が、株式会社親和銀行を完全子会社化。株式会社親和銀行は当行の兄弟会社となる。
2008年1月	株式会社熊本カード(現 株式会社FFGカード)の株式を取得し完全子会社化(現 連結子会社)
2008年8月	株式会社FFGビジネスコンサルティング設立(現 連結子会社)
2009年1月	株式会社熊本ファミリー銀行(現 株式会社熊本銀行)が福岡銀行・広島銀行の共同利用型基幹システムへ参加
2009年2月	株式会社熊本ファミリー銀行(現 株式会社熊本銀行)及び株式会社親和銀行が有する事業再生事業及び不良債権処理事業を吸収分割により当行に承継
2010年1月	株式会社親和銀行が福岡銀行・広島銀行の共同利用型基幹システムへ参加
2012年4月	前田証券株式会社(現 FFG証券株式会社)を株式交換により完全子会社化(現 連結子会社)
2016年8月	株式会社FFGほけんサービス設立(現 連結子会社)
2018年7月	株式会社R&Dビジネスファクトリー設立(現 連結子会社)
2019年4月	親会社の「株式会社ふくおかフィナンシャルグループ」が、株式会社十八銀行を完全子会社化。株式会社十八銀行は当行の兄弟会社となる。

### 3 【事業の内容】

当行グループは、当行、連結子会社13社で構成され、銀行業務を中心に証券業務、保証業務、事業再生支援・債権管理回収業務などの金融サービスを提供しております。なお、当行グループは、単一セグメントであるため、事業の区分は事業内容別に記載しております。

当行グループの事業に係わる位置づけは次のとおりであります。

〔銀行業〕

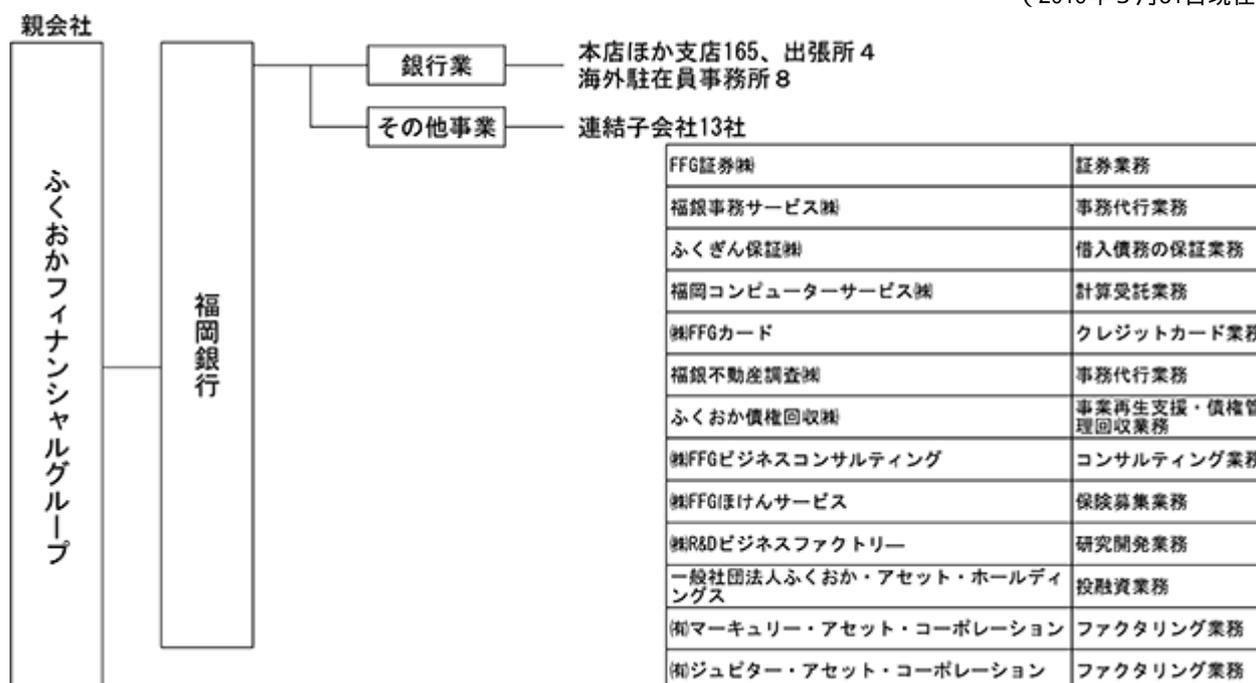
当行の本店ほか支店165ヶ店、出張所4ヶ店、海外駐在員事務所8ヶ所により運営されており、福岡県を主要営業基盤に、預金業務、貸出業務、内国為替業務、外国為替業務等を行っております。

〔その他〕

FFG証券株式会社、ふくぎん保証株式会社、ふくおか債権回収株式会社ほか連結子会社10社により、証券業務、保証業務、事業再生支援・債権管理回収業務等を行っております。

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。

(2019年3月31日現在)



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有(又は 被所有) 割合 (%)	当行との関係内容				
					役員の 兼任等 (人)	資金 援助	営業上 の取引	設備の 賃貸借	業務 提携
(親会社) 株式会社ふくおか フィナンシャルグループ	福岡市 中央区	124,799	子会社の経 営管理業務	100	9 (9)		経営管理 金銭貸借 預金取引	当行より建物 の一部賃借	
(連結子会社) FFG証券株式会社	福岡市 中央区	3,000	証券業務	100	1		預金取引	当行より建物 の一部賃借	証券仲介 業務
福銀事務サービス株式会社	福岡市 早良区	100	事務代行業 務	100	1		預金取引		
ふくぎん保証株式会社	福岡市 西区	30	借入債務の 保証業務	100	3		保証取引 預金取引	当行より建物 の一部賃借	
福岡コンピューターサー ビス株式会社	福岡市 博多区	50	計算受託業 務	100	2		預金取引	当行より建物 の一部賃借	
株式会社FFGカード	福岡市 西区	50	クレジット カード業務	100	3		預金取引	当行より建物 の一部賃借	
福銀不動産調査株式会社	福岡市 東区	30	事務代行業 務	100	3		預金取引		
ふくおか債権回収株式会社	福岡市 中央区	500	事業再生支 援・債権管 理回収業務	100	1		預金取引	当行より建物 の一部賃借	
株式会社FFGビジネスコン サルティング	福岡市 中央区	50	コンサル ティング業 務	100	3		預金取引	当行より建物 の一部賃借	
株式会社FFGほけんサー ビス	福岡市 中央区	200	保険募集業 務	100	3		金銭貸借 預金取引	当行より建物 の一部賃借	保険募集 業務
株式会社R&Dビジネスファ クトリー	福岡市 中央区	100	研究開発業 務	100	7 (2)		金銭貸借 預金取引	当行より建物 の一部賃借	
一般社団法人ふくおか・ア セット・ホールディングス	福岡市 中央区	25	投融資業務				預金取引		
有限会社マーキュリー・ア セット・コーポレーション	福岡市 中央区	6	ファクタリ ング業務				金銭貸借 預金取引		
有限会社ジュピター・ア セット・コーポレーション	福岡市 中央区	3	ファクタリ ング業務				金銭貸借 預金取引		

(注) 1 上記関係会社のうち、有価証券報告書(又は有価証券届出書)を提出している会社は株式会社ふくおかフィナンシャルグループであります。

2 「当行との関係内容」の「役員の兼任等」欄の( )内は、当行の役員(内書き)であります。

## 5 【従業員の状況】

### (1) 連結会社における従業員数

2019年3月31日現在			
事業内容の名称	銀行業	その他	合計
従業員数(人)	3,718 [1,237]	923 [405]	4,641 [1,642]

- (注) 1 従業員数は、嘱託及び臨時従業員1,625人(銀行業1,224人、その他401人)、並びに執行役員14人を含んでおりません。
- 2 当行グループは、単一セグメントであるため、事業内容別の従業員数を記載しております。
- 3 臨時従業員数は、[ ]内に年間の平均人員を外書きで記載しております。
- 4 臨時従業員数は、銀行業の所定労働時間に換算し算出しております。

### (2) 当行の従業員数

2019年3月31日現在			
従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
3,718 [1,237]	37.5	14.2	6,667

- (注) 1 従業員数は、嘱託及び臨時従業員1,224人、並びに執行役員14人を含んでおりません。
- 2 当行の従業員は、すべて銀行業に属しております。
- 3 臨時従業員数は、[ ]内に年間の平均人員を外書きで記載しております。
- 4 臨時従業員数は、銀行業の所定労働時間に換算し算出しております。
- 5 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
- 6 当行の従業員組合は、福岡銀行従業員組合と称し、組合員数は3,127人であります。労使間においては特記すべき事項はありません。

## 第2 【事業の状況】

### 1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当行グループが判断したものであります。

#### (1) 経営の基本方針

##### グループ経営理念

ふくおかフィナンシャルグループ(以下「F F G」といいます。)は、福岡銀行、熊本銀行、親和銀行をグループ傘下に持つ広域展開型地域金融グループとして、営業基盤である九州を中心に、稠密な営業ネットワークを活かし、高度かつ多様な金融商品・サービスを展開しております。

F F Gの子銀行グループである当行グループは、以下の経営理念を基本として、金融サービスの向上を通じて地域社会に対してより多くの貢献を果たすとともに、持続的な成長と中長期的な企業価値の向上を目指してまいります。

#### ふくおかフィナンシャルグループ経営理念

ふくおかフィナンシャルグループは、  
**高い感受性と失敗を恐れない行動力を持ち、**  
**未来志向で高品質を追求し、**  
**人々の最良な選択を後押しする、**  
すべてのステークホルダーに対し、価値創造を提供する金融グループを目指します。

##### グループブランド

F F G各社は、グループ経営理念を共通の価値観として行動し、お客さま、地域社会、株主の皆さま、そして従業員にとって真に価値ある存在であり続けるための約束として、『コアバリュー』を表明し、ブランドスローガン『あなたのいちばんに。』を展開してまいります。

#### ブランドスローガン

**あなたのいちばんに。**

#### コアバリュー (ブランドスローガンに込められたお客さまへの約束)

##### ・ いちばん身近な銀行

お客さまの声に親身に心から耳を傾け、対話し、共に歩みます。

##### ・ いちばん頼れる銀行

豊富な知識と情報を活かし、お客さま一人ひとりに最も適したサービスを提供します。

##### ・ いちばん先を行く銀行

金融サービスのプロ集団として、すべての人の期待を超える提案を続けます。

## (2)中長期的な会社の経営戦略

F F Gは、2016年度から次の10年を見据えた「進化のステージ」に入り、その第1ステージとして「第5次中期経営計画～“ザ・ベストリージョナルバンク”を目指して～(2016年4月～2019年3月)」（以下、第5次中計といいます。）を完遂させ、2019年度から第2ステージとして「第6次中期経営計画(2019年4月～2022年3月)」（以下、「第6次中計」といいます。）をスタートさせました。

第6次中計では、基本方針として掲げる「『地域経済発展への貢献』と『F F G企業価値の向上』との好循環サイクルの実現」に基づき、「業務プロセスの再構築」「事業モデルの高度化」「デジタルトランスフォーメーションの推進」での構造改革と、それを下支えする「人財力の最大化」「グループ総合力の強化」の5つの基本戦略を据えて、各種戦略・施策を展開してまいります。

### (イ) 業務プロセスの再構築

これまで取り組んできた働き方改革、業務改革の成果を具現化していくとともに、デジタル化・自動化・本部集中化などにより、営業店を中心とした業務プロセスをゼロベースで見直し、大幅な効率化を進めていくことで、ヒト・時間・空間などのリソースを捻出し、営業店を今まで以上にコンサルティングの場へ変革してまいります。

また、効率化により捻出されたリソースを、コア事業や成長分野などに投入し、営業力の向上やイノベーションの創出を図ってまいります。

### (ロ) 事業モデルの高度化

お客さまとの対話を通じた真の課題・ニーズの把握を行い、法人・個人双方において、専門性を極めた高品質な金融サービスを提供することで、お客さまから真の評価を獲得する、お客さま本位のソリューション営業スタイルを確立してまいります。

また、市場運用を貸出金に次ぐ第2の収益の柱とすべく、多様化投資の拡充や分散投資によるリスク抑制型のポートフォリオを構築していくことで、収益の向上および安定化を図ってまいります。

加えて、対面・非対面チャネルの高度化及び円滑な連携により、お客さまニーズに沿った商品・サービスを最適なタイミングで提供してまいります。

### (ハ) デジタルトランスフォーメーションの推進

デジタル技術進展に伴うお客さまの行動や社会構造の変容に対応するため、アジャイル開発やデータ・API(アプリケーションプログラミングインターフェース)基盤利活用体制の構築を進めるとともに、業務プロセス・意思決定方法・お客さまへの提供価値等のビジネスを根本的に変革するデジタルトランスフォーメーションを推進してまいります。

また、iBank事業の拡充を進めるとともに、お取引先に対するデジタル化支援の取組みやBaaS( )の展開検討など、新事業を創出・推進してまいります。

Banking as a Service:金融機能・商品等を様々な事業者に対しサービスとして提供

### (ニ) 人財力の最大化

事業戦略と外部環境の変化を踏まえ、変革をリードしていく人財や金融高度化を担う人財、デジタルの専門人財など、多様かつ高度な人財の育成を図るとともに、グループ全体で人財の最適配置を可能とする体制を構築してまいります。

加えて、組織のフラット化や多様な人財・働き方に応えるための評価・処遇基準の再設計などを通じて、従業員が働き甲斐を実感できる体制を整備していくことで、組織の持続的成長に繋げてまいります。

### (ホ) グループ総合力の強化

F F G(持株会社)の既存機能の強化に加え、子銀行業務の一部を集約することで、シングルプラットフォームを強化するとともに、グループ会社の新機能の検討などを進めてまいります。

また、お客さまや営業店の声を収集・分析し、諸施策へ迅速に反映させる仕組みづくりや、営業店・本部の意思疎通の活性化など、環境の変化やお客さまニーズの変化に柔軟に対応できる組織への変革を図ってまいります。

### (ヘ) 十八銀行との経営統合

2019年4月に長崎県経済の活性化に貢献していくことを目的とした十八銀行との経営統合を実現し、2020年10月に親和銀行と十八銀行との合併、2021年1月に両行のシステム統合を予定しております。

合併後の新銀行においては、システム統合によるシステムコストの削減、店舗統廃合や本部スリム化による営業人員の捻出を柱とする合併・統合シナジーを最大化するとともに、FFGのグループ総合力を発揮することで、長崎県経済の発展に貢献する「顧客満足度NO.1銀行」を目指してまいります。

当行グループは、以上の取組みを通じて、あらゆる環境変化に柔軟に対応できる組織になるとともに、人財力とデジタル技術を活用し、金融の枠を超えてお客さまのために行動することで、お客さまの成長と地域経済発展に貢献する金融グループを目指してまいります。

### (3) 会社の対処すべき課題

2019年度の我が国経済は、世界経済の動向等に留意する必要があるものの、雇用や所得環境の改善が続くなかで、緩やかな拡大が続くことが期待されます。

他方、地域金融機関を取り巻く環境は、人口減少・少子高齢化の進行などの構造的な課題に加え、デジタル技術の急速な進展によって、異業種からの銀行業への新規参入が相次いでおり、今後もデジタル化のトレンドによって社会や産業構造が変容し、お客さまの行動の変化やニーズの多様化が進んでいくことが想定されます。

このような急速な環境変化のなかで、地域金融機関としての最大の使命である、地域経済の成長・発展に貢献していくためには、人と人との対話を通じて多様化するお客さまの課題やニーズを捉えて、これまで以上に最適なソリューションを提供していくとともに、デジタル技術の活用による経営の効率化や新たな事業領域の拡大にチャレンジしていく必要があります。

2019年度からスタートした第6次中計では、第5次中計に続く“進化”の第2ステージとして、これまで進めてきた構造改革を加速させ、捻出したリソースの成長分野などへの投入やデジタル技術の活用により、事業モデルの高度化を進めていくなど改革の成果を具現化していくとともに、事業領域の更なる拡大に向けた営業基盤の構築を進めてまいります。加えて、親和銀行と十八銀行の合併を着実に遂行し、早期に統合シナジー効果を創出することで、長崎の経済活性化に貢献してまいります。

## 2 【事業等のリスク】

当行及び当行グループの事業その他に関するリスクについて、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性があると考えられる主な事項を記載しております。また、必ずしもそのようなリスク要因に該当しない事項についても、投資者の投資判断上、重要であると考えられる事項については、投資者に対する積極的な情報開示の観点から開示しております。各項目に掲げられたリスクは、それぞれが独立するものではなく、ある項目のリスクの発生が関連する他の項目のリスクに結びつき、リスクが増大する可能性があることについてもご留意ください。

なお、本項においては、将来に関する事項が含まれておりますが、当該事項は、別段の記載のない限り、有価証券報告書提出日現在において判断したものであります。

### 1 経営統合に関するリスク(期待した統合効果を十分に発揮できない可能性)

2007年4月の親会社であるF F G設立(当行と熊本ファミリー銀行(現 熊本銀行)の経営統合)以降、F F Gは2007年10月に親和銀行と、2019年4月には十八銀行と経営統合するなど、F F Gグループ(金融持株会社であるF F G、当行、熊本銀行、親和銀行、十八銀行並びにそれらの連結子会社から構成される企業集団をいいます。以下同じ。)は質の高い金融サービスを提供する広域展開型地域金融グループを目指して、事務やIT基盤の共通化等、統合効果を最大限に発揮するために最善の努力をいたしております。

しかしながら、業務面での協調体制強化や営業戦略の不奏功、顧客との関係悪化、対外的信用力の低下、想定外の追加費用の発生等により、当初期待した統合効果を十分に発揮できず、結果として当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

### 2 ビジネス戦略に関するリスク

当行グループは、中長期的な企業価値向上を目指して様々なビジネス戦略を展開しておりますが、想定を上回る経営環境の変化、あるいは戦略展開に必要なスキルを有する人材の不足等により、想定した通りの収益が計上できない場合、あるいは想定を上回るコスト等が発生した場合、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

### 3 コンプライアンスに関するリスク

当行グループでは、コンプライアンス(法令等遵守)を経営の重要な課題と位置付け、態勢整備及び役職員に対する教育研修に努めておりますが、今後、役職員による不法行為、社会規範に悖る行為、あるいは利用者視点の欠如した行為等に起因し多大な損失が発生したり、当行グループの使用者責任が問われ信用低下等が生じたりした場合、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

### 4 信用リスク(不良債権問題)

貸出先の財務状況悪化等に起因する信用リスクは、当行グループが保有する最大のリスクであり、この信用リスクによって生じる信用コスト(与信関連費用)が増加する要因として以下のものがあります。

#### (1) 不良債権の増加

当行グループの不良債権は、世界経済及び日本経済の動向、不動産価格及び株価の変動、貸出先の経営状況等によっては増加する可能性があります。その結果、現時点の想定を上回る信用コストが発生した場合、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

#### (2) 貸倒引当金の積み増し

当行グループは、貸出先の財務状況、担保等による債権保全及び企業業績に潜在的に影響する経済要因等に基づいて、貸倒引当金を計上しております。貸出先の財務状況等が予想を超えて悪化した場合、現時点で見積もり計上した貸倒引当金が不十分となる可能性があります。また、地価下落等に伴い担保価値が低下し債権保全が不十分となった場合、貸倒引当金の積み増しが必要となる可能性があります。このような場合、信用コストが増加し、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

#### (3) 特定の業種における経営環境悪化

当行グループの貸出先の中には、世界経済及び日本経済の動向及び特定の業種における経営環境の変化等により、当該業種に属する企業の信用状態の悪化、担保・保証等の価値下落等が生じる可能性があります。

このような場合、当行グループのこれら特定の業種における不良債権残高及び信用コストが増加し、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

(4) 貸出先への対応

当行グループは、貸出先のデフォルト(債務不履行等)に際して、法的整理によらず私的整理により再建することに経済合理性が認められると判断し、これらの貸出先に対して債権放棄又は追加融資を行って支援を継続することもあり得ます。支援継続に伴う損失額が貸倒引当金計上時点の損失見積額と乖離した場合、信用コストが増加し、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

また、このような貸出先に対しては、再建計画の正確性や実行可能性を十分に検証した上で支援継続を決定いたしますが、その再建が必ず奏功するという保証はありません。再建が奏功しない場合、これらの貸出先の倒産が新たに発生する可能性があります。その結果、信用コストが増加し、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

(5) 権利行使の困難性

当行グループは、不動産市場における流動性の欠如又は価格の下落、有価証券価格の下落等の事情により、デフォルト状態にある貸出先に対して担保権を設定した不動産及び有価証券を処分することができない可能性があります。

このような場合、債権保全を厳格に見積もることによる貸倒引当金の積み増しや、バルクセールによるオフバランス化を進めることもあり得ます。その結果、信用コストが増加し、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

5 自己資本比率

当行グループは、連結自己資本比率及び単体自己資本比率を2006年金融庁告示第19号に定められる国内基準(4%)以上に維持する必要があります。

当行グループの連結自己資本比率又は単体自己資本比率が求められる水準を下回った場合、金融庁長官から業務の全部又は一部の停止命令等を含む様々な命令を受けることとなります。

当行グループの自己資本比率の低下に影響を与える主な要因として以下のものがあります。

(1) 不良債権処理に伴う信用コストの増加

不良債権の発生や処分に伴い発生する信用コストの増加は、当行グループの業績に悪影響を及ぼし、自己資本比率の低下につながる可能性があります。

(2) 繰延税金資産

現時点における会計基準に基づき、一定の条件の下で、将来における税負担額の軽減効果として繰延税金資産を貸借対照表に計上することが認められております。繰延税金資産の計算は、将来の課税所得に関するものを含めた様々な予測・仮定に基づいており、実際の結果がかかる予測・仮定とは異なる可能性があります。その結果、当行又は連結子会社が繰延税金資産の一部又は全部の回収ができないと判断された場合、当行グループの繰延税金資産は減額され、当行グループの業績に悪影響を及ぼし、自己資本比率の低下につながる可能性があります。

(3) その他

その他自己資本比率に影響を及ぼす要因として以下のものがあります。

- ・有価証券の時価の下落に伴う減損処理の増加
- ・貸出金等リスクアセットポートフォリオの変動
- ・自己資本比率の基準及び算定方法の変更
- ・本項記載のその他不利益項目の発生

6 業務に伴うリスク

(1) 市場リスク

当行の市場関連業務においては、様々な金融商品での運用を行っており、金利・為替・株式等の相場変動の影響を受けます。これらについては市場リスク量に対する評価・分析の検証及びモニタリング等を通して適時・適切にリスクをコントロールしていますが、国内外の経済動向・政治情勢等の影響を受けて市場が混乱を来す等により金利・為替・株式等のリスク・ファクターが大幅に変動した場合、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

(2) 流動性リスク

流動性リスクは、運用と調達の間隔のミスマッチや予期せぬ資金の流出により、必要な資金確保が困難になる、又は通常よりも著しく高い金利での調達を余儀なくされることにより損失を被るリスク(資金繰りリスク)及び市場

の混乱等により市場において取引ができなかったり、通常よりも著しく不利な価格での取引を余儀なくされたりすることにより損失を被るリスク(市場流動性リスク)です。

外部の格付機関が当行の親会社であるF F Gや当行の格付けを引き下げたり市場環境が悪化したりすると、これらのリスクが顕在化するおそれがあり、この場合、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

### (3) システムリスク

当行グループは、営業店、A T M及び他行とを結ぶオンラインシステムや顧客情報を蓄積している情報システムを保有しております。当行グループでは、コンピューターシステムの停止や誤作動又は不正利用、外部からのサイバー攻撃等のシステムリスクに対してシステムの安全稼働やセキュリティ対策に万全を期すほか、セキュリティポリシーに則った厳格な情報管理を行うなど運用面での対策を実施しております。しかしながら、これらの対策にもかかわらず、重大なシステム障害が発生した場合、あるいは、サイバー攻撃によるシステムの停止等が発生した場合、決済業務に支障をきたす等当行グループの事業に重大な影響を及ぼす可能性があります。その結果、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

### (4) 事務リスク

当行グループでは、事務規程等に則った正確な事務処理を励行することを徹底し、事務事故の未然防止を図るため事務管理体制の強化に努めております。しかしながら、これらの対策にもかかわらず、重大な事務リスクが顕在化した場合、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

### (5) 金融犯罪等に係るリスク

当行グループでは、キャッシュカードの偽造・盗難や振り込み詐欺等の金融犯罪による被害を防止するため、セキュリティ強化に向けた対策を講じております。また、マネー・ローンダリング及びテロ資金供与防止を経営の重要な課題と位置付け、管理態勢の強化に取り組んでおります。しかしながら、高度化する金融犯罪等の発生により、不公正・不適切な取引を未然に防止できなかった場合、不測の損失の発生や信用失墜等により、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

### (6) 情報漏洩等のリスク

当行グループでは、膨大な顧客情報を保有しており、情報管理に関する規程及び体制の整備や従業員教育の徹底により、情報資産の厳正な管理に努めております。しかしながら、今後、不適切な管理、あるいは、外部からのサイバー攻撃等により顧客情報や経営情報等の漏洩、紛失、改ざん、不正利用等が発生し、損害賠償等に伴う直接的な損失や、当行グループの信用低下等が生じた場合、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

### (7) 有形資産リスク

当行グループが所有及び賃借中の土地、建物、車両等の有形資産について、自然災害、犯罪行為、資産管理上の瑕疵等の結果、毀損、焼失あるいは劣化することにより業務の運営に支障をきたす可能性があります。また、固定資産の減損会計適用に伴い、評価額が低下した場合等には損失が発生する可能性があります。これら有形資産に係るリスクが顕在化した場合、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

### (8) 労務リスク

当行グループでは、労働関連法令に基づき適切な労務管理を行っておりますが、労務管理面及び安全衛生環境面での問題等に起因して損失が発生した場合、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

### (9) 法務リスク

当行グループは、事業活動を行う上で、会社法、金融商品取引法、銀行法等の法令諸規制を受けるほか、各種取引上の契約を締結しております。当行グループは、これら法令諸規制や契約内容が遵守されるよう法務リスク管理等を行っておりますが、法令解釈の相違、法令手続きの不備、法令違反行為等により法令諸規制や契約内容を遵守できなかった場合、罰則適用や損害賠償等に伴う損失が発生し、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

(10) 内部統制の構築等に係るリスク

F F Gは、金融商品取引法に基づき、連結ベースの財務報告に係る内部統制が有効に機能しているか否かを評価し、その結果を内部統制報告書において開示しております。

当行グループは、F F Gグループの一員として、適正な内部統制の構築、維持、運営に努めておりますが、予期しない問題が発生した場合等において、財務報告に係る内部統制の評価手続きの一部を実施できないことや、内部統制の重要な欠陥が存在すること等を余儀なく報告する可能性もあります。そのような場合、当行グループの業績及び財務状況並びにF F Gの株価に悪影響を及ぼす可能性があります。

(11) 業務範囲拡大に伴うリスク

当行グループは、法令等の規制緩和に伴う業務範囲の拡大等を前提とした多様な営業戦略を実施しております。当該業務の拡大が予想通りに進展せず想定した結果を得られない場合、営業戦略が奏功しないことにより、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

(12) 競争

当行が属するF F Gグループが主要な営業基盤とする福岡県、熊本県及び長崎県をはじめ営業戦略の上で広域展開を図る九州地区は、今後、他金融機関の進出や業務拡大に加え、地元金融機関同士の再編も予想されます。また、デジタル技術の急速な進展によって、異業種からの銀行業への新規参入が相次ぐことも想定されます。

当行グループがこのような事業環境において競争優位を得られない場合、営業戦略が奏功しないことにより、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

7 その他

(1) 各種規制の変更リスク

銀行は、事業運営上の様々な公的規制や金融システム秩序維持のための諸規制・政策のもとで業務を遂行しております。仮に一金融機関の経営破綻であっても連鎖反応により金融システム全体に重大な影響が及ぶおそれがある場合、これらの諸規制・政策が変更される可能性があります。現時点でその影響を予測することは困難ですが、コストの増加につながる場合、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

(2) 地域経済の動向に影響を受けるリスク

当行グループは、福岡県を中心とした九州地区を営業基盤としていることから、地域経済が悪化した場合は、業容の拡大が図れないほか、信用リスクが増加するなどして当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

(3) 他金融機関等との提携等に関するリスク

当行グループは、経営環境の変化を踏まえ、高い企業価値を実現するための経営戦略を立案・策定し、他金融機関等との提携・協力関係を構築しております。しかしながら、金融機関を取り巻く経済・経営環境に関する前提条件が予想を超えて変動する等により、これら提携等が予定したとおりに完了しない可能性があります。また、新たな提携等が実現したとしても、当該提携等が当初想定したとおりの効果を生まない可能性もあります。

(4) 退職給付債務

当行の退職給付費用及び債務は、割引率等数理計算上で設定される前提条件に基づき算出されております。これらの前提条件が変更された場合、又は実際の年金資産の時価が下落した場合、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

(5) 会計制度変更に伴うリスク

国際会計基準の適用等、会計制度の変更はコストの増加につながる可能性があります。現時点で将来の会計制度変更について、その影響を予測することは困難ですが、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

(6) 風評リスク

当行グループや金融業界に対するネガティブな報道や風説・風評の流布が発生した場合、それが事実であるか否かにかかわらず、当行グループの業績及び財務状況並びにF F Gの株価に悪影響を及ぼす可能性があります。

(7) 外的要因により業務継続に支障をきたすリスク

当行グループの本部・営業店及び事務センター・システムセンター等の被災、停電、コンピューターウィルス、第三者の役務提供の欠陥等による大規模なシステム障害の発生、テロ、新型インフルエンザ等感染症の世界的流行等の外的要因により、当行グループにおける業務の全部又は一部の継続に支障をきたし、当行グループの事業に重大な影響を及ぼす可能性があります。その結果、当行グループの業績及び財務状況に悪影響を及ぼす可能性があります。

### 3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

#### (1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当行グループ(当行及び連結子会社)の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー(以下、「経営成績等」という。)の状況の概要は次のとおりであります。

##### (金融経済環境)

2018年度の我が国経済は、期末にかけて輸出や生産の一部に弱さが見られたものの、海外経済の着実な成長や、高水準で推移した企業収益のもと設備投資の増加が続いたほか、雇用・所得環境の着実な改善を背景に個人消費が持ち直しを続けるなど、総じて緩やかな回復基調が続きました。

当行グループの営業基盤である九州圏内においては、生産や輸出が自動車・半導体関連で一部弱含みつつも、総じて高水準で推移したほか、人手不足への対応や生産の国内回帰の流れを受けて設備投資が増加するなど、景気全体は緩やかな拡大が続きました。

金融面では、円相場は、年末の米国株価急落等を受けたりスク回避による一時的な円高の進行は見られたものの、年度を通じた米国の良好な景気指標等を背景に総じて円安ドル高の展開が続きました。日経平均株価は、年度前半は、円安ドル高の進行や米中貿易摩擦への懸念が緩和されたこと等を背景に24,000円台まで株高が進みましたが、年度後半は、世界経済の減速懸念等を受けて一時20,000円台を割る水準まで下落するなど、変動の大きい一年となりました。金利は、長期金利の指標となる10年物国債の利回りが、7月の日銀による金融政策決定会合で導入されたフォワードガイダンスを受けて0.1%を超える水準となりましたが、年度後半にかけて0%均衡まで低下し、マイナス圏を行き来する展開となりました。

F F Gグループは、2016年度からスタートした第5次中計で掲げる各種施策を確実に実行し「コア事業の磨き上げ」を図るとともに、「構造改革」による生産性の向上や営業力の強化、「イノベーションの加速化」による新たなサービスの創出といった、将来の環境変化を見据えた体制強化に取り組んでまいりました。

##### (財政状態及び経営成績の状況)

当連結会計年度の経営成績につきましては、以下のとおりとなりました。

連結経常収益は、資金運用収益の増加等により、前年比120億5百万円増加し、1,956億8千2百万円となりました。連結経常費用は、資金調達費用の増加等により、前年比5億6千9百万円増加し、1,219億4千4百万円となりました。

以上の結果、連結経常利益は、前年比114億3千6百万円増加し、737億3千8百万円となりました。また、親会社株主に帰属する当期純利益は、前年比96億1千1百万円増加し、536億5千5百万円となりました。

当連結会計年度末の総資産は、前年比6,302億円増加し、17兆4,097億円となりました。また、純資産は、前年比4億円減少し、7,004億円となりました。

主要勘定残高につきましては、預金等(譲渡性預金を含む)は、前年比2,410億円増加し、10兆6,094億円となりました。貸出金は、法人・個人ともに順調に増加した結果、前年比3,776億円増加し、9兆8,712億円となりました。また、有価証券は、前年比2,478億円減少し、2兆1,396億円となりました。

(キャッシュ・フローの状況)

当連結会計年度末における現金及び現金同等物は、前年比468億5千9百万円増加し、3兆5,078億1千7百万円となりました。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における営業活動によるキャッシュ・フローは、1,270億1千8百万円のマイナスとなり、前年比1兆1,957億1千万円減少しました。これは、債券貸借取引受入担保金等の純増減の減少等によるものであります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における投資活動によるキャッシュ・フローは、2,142億1百万円のプラスとなり、前年比1,387億4千6百万円増加しました。これは、有価証券の償還による収入の増加等によるものであります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における財務活動によるキャッシュ・フローは、403億4千8百万円のマイナスとなり、前年比225億1千6百万円減少しました。これは、劣後特約付借入金の返済による支出の増加等によるものであります。

(参考)

## (1) 国内業務部門・国際業務部門別収支

当連結会計年度の資金運用収支は前年比37億9千4百万円増加して1,146億9千9百万円、役務取引等収支は前年比17億5千2百万円減少して239億9千9百万円、特定取引収支は前年比8千7百万円増加して1億7千2百万円、その他業務収支は前年比29億7千4百万円増加して108億9百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額( )	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
資金運用収支	前連結会計年度	103,486	7,418		110,905
	当連結会計年度	107,006	7,693		114,699
うち資金運用収益	前連結会計年度	112,616	16,400	40	128,976
	当連結会計年度	111,093	25,655	43	136,792
うち資金調達費用	前連結会計年度	9,130	8,981	40	18,071
	当連結会計年度	4,086	17,962	43	22,093
信託報酬	前連結会計年度	0			0
	当連結会計年度	0			0
役務取引等収支	前連結会計年度	25,112	639		25,751
	当連結会計年度	23,437	561		23,999
うち役務取引等収益	前連結会計年度	39,230	826		40,057
	当連結会計年度	38,106	740		38,846
うち役務取引等費用	前連結会計年度	14,118	187		14,305
	当連結会計年度	14,668	178		14,846
特定取引収支	前連結会計年度	10	74		85
	当連結会計年度	14	157		172
うち特定取引収益	前連結会計年度	10	74		85
	当連結会計年度	14	157		172
うち特定取引費用	前連結会計年度				
	当連結会計年度				
その他業務収支	前連結会計年度	7,622	213		7,835
	当連結会計年度	9,112	1,697		10,809
うちその他業務収益	前連結会計年度	8,352	1,112		9,464
	当連結会計年度	9,122	1,703		10,825
うちその他業務費用	前連結会計年度	729	899		1,629
	当連結会計年度	9	6		15

(注) 1 「国内」・「海外」の区分に替えて、「国内業務部門」・「国際業務部門」で区分しております。「国内業務部門」は、銀行業の国内店の円建取引及び国内連結子会社の円建取引であります。「国際業務部門」は、銀行業の国内店の外貨建取引及び連結子会社の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

2 「相殺消去額」は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借利息であります。

3 資金調達費用は、金銭の信託運用見合費用を控除して表示しております。

## (2) 国内業務部門・国際業務部門別資金運用 / 調達の状況

資金運用勘定は、平均残高が前年比9,939億5千5百万円増加して12兆8,166億7千8百万円となりました。利息は前年比78億1千6百万円増加して1,367億9千2百万円、利回りは前年比0.03%低下して1.06%となりました。

資金調達勘定は、平均残高が前年比1兆2,973億8千8百万円増加して15兆4,779億8千万円となりました。利息は前年比40億2千2百万円増加して220億9千3百万円、利回りは前年比0.02%上昇して0.14%となりました。

## 国内業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	11,262,118	112,616	0.99
	当連結会計年度	12,180,247	111,093	0.91
うち貸出金	前連結会計年度	8,735,141	92,865	1.06
	当連結会計年度	9,112,254	90,875	0.99
うち有価証券	前連結会計年度	2,058,891	18,226	0.88
	当連結会計年度	1,934,345	19,245	0.99
うちコールローン及び 買入手形	前連結会計年度	221,058	64	0.02
	当連結会計年度	817,541	425	0.05
うち預け金	前連結会計年度	13,462	2	0.01
	当連結会計年度	14,452	1	0.00
資金調達勘定	前連結会計年度	13,637,211	9,130	0.06
	当連結会計年度	14,865,763	4,086	0.02
うち預金	前連結会計年度	9,504,341	2,312	0.02
	当連結会計年度	9,884,980	513	0.00
うち譲渡性預金	前連結会計年度	429,054	79	0.01
	当連結会計年度	340,119	43	0.01
うちコールマネー及び 売渡手形	前連結会計年度	625,600	330	0.05
	当連結会計年度	1,487,989	1,133	0.07
うち売現先勘定	前連結会計年度			
	当連結会計年度	963,474	1,286	0.13
うち債券貸借取引受入 担保金	前連結会計年度	1,809,517	180	0.00
	当連結会計年度	853,545	85	0.01
うち借入金	前連結会計年度	1,255,846	342	0.02
	当連結会計年度	1,322,692	211	0.01

(注) 1 平均残高は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、連結子会社については、半年毎の残高に基づく平均残高を利用しております。

2 「国内業務部門」は、銀行業の国内店の円建取引及び国内連結子会社の円建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

3 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高を、資金調達勘定は金銭の信託運用見合額の平均残高及び利息を、それぞれ控除して表示しております。

## 国際業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	673,502	16,400	2.43
	当連結会計年度	797,950	25,655	3.21
うち貸出金	前連結会計年度	375,311	7,011	1.86
	当連結会計年度	473,030	12,304	2.60
うち有価証券	前連結会計年度	288,458	7,418	2.57
	当連結会計年度	311,588	8,322	2.67
うちコールローン及び 買入手形	前連結会計年度	6,880	85	1.23
	当連結会計年度	6,740	140	2.09
うち預け金	前連結会計年度	582	1	0.23
	当連結会計年度	805	0	0.11
資金調達勘定	前連結会計年度	656,279	8,981	1.36
	当連結会計年度	773,736	17,962	2.32
うち預金	前連結会計年度	148,146	1,639	1.10
	当連結会計年度	191,285	3,543	1.85
うち譲渡性預金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うちコールマネー及び 売渡手形	前連結会計年度	23,397	390	1.66
	当連結会計年度	24,849	664	2.67
うち売現先勘定	前連結会計年度	101,748	1,904	1.87
	当連結会計年度	103,200	3,018	2.92
うち債券貸借取引受入 担保金	前連結会計年度	230,967	2,874	1.24
	当連結会計年度	233,978	4,769	2.03
うち借入金	前連結会計年度	38,468	548	1.42
	当連結会計年度	56,954	1,435	2.52

- (注) 1 平均残高は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、連結子会社については、半年毎の残高に基づく平均残高を利用しております。
- 2 「国際業務部門」は、銀行業の国内店の外貨建取引及び連結子会社の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。
- 3 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は、月次カレント方式（前月末のTT仲値を当該月のノンエクスチェンジ取引に適用する方式）により算出しております。

合計

種類	期別	平均残高(百万円)			利息(百万円)			利回り (%)
		小計	相殺 消去額 ( )	合計	小計	相殺 消去額 ( )	合計	
資金運用勘定	前連結会計年度	11,935,621	112,898	11,822,723	129,017	40	128,976	1.09
	当連結会計年度	12,978,198	161,519	12,816,678	136,749	43	136,792	1.06
うち貸出金	前連結会計年度	9,110,453		9,110,453	99,877		99,877	1.09
	当連結会計年度	9,585,285		9,585,285	103,179		103,179	1.07
うち有価証券	前連結会計年度	2,347,349		2,347,349	25,645		25,645	1.09
	当連結会計年度	2,245,934		2,245,934	27,567		27,567	1.22
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	227,939		227,939	20		20	0.00
	当連結会計年度	824,282		824,282	284		284	0.03
うち預け金	前連結会計年度	14,045		14,045	3		3	0.02
	当連結会計年度	15,257		15,257	2		2	0.01
資金調達勘定	前連結会計年度	14,293,490	112,898	14,180,592	18,111	40	18,071	0.12
	当連結会計年度	15,639,500	161,519	15,477,980	22,049	43	22,093	0.14
うち預金	前連結会計年度	9,652,488		9,652,488	3,952		3,952	0.04
	当連結会計年度	10,076,266		10,076,266	4,056		4,056	0.04
うち譲渡性預金	前連結会計年度	429,054		429,054	79		79	0.01
	当連結会計年度	340,119		340,119	43		43	0.01
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	648,997		648,997	59		59	0.00
	当連結会計年度	1,512,838		1,512,838	468		468	0.03
うち売現先勘定	前連結会計年度	101,748		101,748	1,904		1,904	1.87
	当連結会計年度	1,066,674		1,066,674	1,731		1,731	0.16
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	2,040,484		2,040,484	3,055		3,055	0.14
	当連結会計年度	1,087,524		1,087,524	4,854		4,854	0.44
うち借入金	前連結会計年度	1,294,314		1,294,314	890		890	0.06
	当連結会計年度	1,379,647		1,379,647	1,646		1,646	0.11

(注) 1 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高を、資金調達勘定は金銭の信託運用見合額の平均残高及び利息を、それぞれ控除して表示しております。

2 「相殺消去額」は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息であります。

(3) 国内業務部門・国際業務部門別役務取引の状況

役務取引等収益は、前年比12億1千1百万円減少して388億4千6百万円となりました。

役務取引等費用は、前年比5億4千1百万円増加して148億4千6百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額( )	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
役務取引等収益	前連結会計年度	39,230	826		40,057
	当連結会計年度	38,106	740		38,846
うち預金・貸出業務	前連結会計年度	15,632	423		16,056
	当連結会計年度	16,856	340		17,197
うち為替業務	前連結会計年度	9,806	379		10,186
	当連結会計年度	9,609	377		9,986
うち証券関連業務	前連結会計年度	2,380			2,380
	当連結会計年度	2,049			2,049
うち代理業務	前連結会計年度	667			667
	当連結会計年度	665			665
うち保護預り・貸金庫業務	前連結会計年度	268			268
	当連結会計年度	279			279
うち保証業務	前連結会計年度	146	23		170
	当連結会計年度	160	21		181
うち投資信託・保険販売業務	前連結会計年度	10,327			10,327
	当連結会計年度	8,486			8,486
役務取引等費用	前連結会計年度	14,118	187		14,305
	当連結会計年度	14,668	178		14,846
うち為替業務	前連結会計年度	4,669	76		4,745
	当連結会計年度	4,566	87		4,653

(注) 「国内業務部門」は、銀行業の国内店の円建取引及び国内連結子会社の円建取引であります。「国際業務部門」は、銀行業の国内店の外貨建取引及び連結子会社の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

(4) 国内業務部門・国際業務部門別特定取引の状況

特定取引収益・費用の内訳

特定取引収益は、前年比8千7百万円増加して1億7千2百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額( )	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
特定取引収益	前連結会計年度	10	74		85
	当連結会計年度	14	157		172
うち商品有価証券収益	前連結会計年度	10	74		85
	当連結会計年度	14	157		172
うち特定金融派生商品収益	前連結会計年度				
	当連結会計年度				
うちその他の特定取引収益	前連結会計年度				
	当連結会計年度				
特定取引費用	前連結会計年度				
	当連結会計年度				

(注) 1 「国内業務部門」は、銀行業の国内店の円建取引及び国内連結子会社の円建取引であります。「国際業務部門」は、銀行業の国内店の外貨建取引及び連結子会社の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

2 内訳科目は、それぞれ収益と費用で相殺し、収益が上回った場合には収益欄に、費用が上回った場合には費用欄に、上回った純額を計上しております。

特定取引資産・負債の内訳(未残)

特定取引資産は、前年比3億6百万円減少して13億7千2百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額( )	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
特定取引資産	前連結会計年度	1,678			1,678
	当連結会計年度	1,372			1,372
うち商品有価証券	前連結会計年度	1,678			1,678
	当連結会計年度	1,372			1,372
うち商品有価証券 派生商品	前連結会計年度				
	当連結会計年度				
うちその他の特定 取引資産	前連結会計年度				
	当連結会計年度				
特定取引負債	前連結会計年度	0			0
	当連結会計年度	0			0
うち商品有価証券 派生商品	前連結会計年度	0			0
	当連結会計年度	0			0

(注) 「国内業務部門」は、銀行業の国内店の円建取引及び国内連結子会社の円建取引であります。「国際業務部門」は、銀行業の国内店の外貨建取引及び連結子会社の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定等は国際業務部門に含めております。

(5) 国内業務部門・国際業務部門別預金残高の状況

預金の種類別残高(未残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
預金合計	前連結会計年度	9,925,643	245,252	10,170,895
	当連結会計年度	10,229,150	200,899	10,430,050
うち流動性預金	前連結会計年度	6,732,348		6,732,348
	当連結会計年度	7,191,259		7,191,259
うち定期性預金	前連結会計年度	3,075,508		3,075,508
	当連結会計年度	2,964,590		2,964,590
うちその他	前連結会計年度	117,786	245,252	363,038
	当連結会計年度	73,301	200,899	274,201
譲渡性預金	前連結会計年度	197,481		197,481
	当連結会計年度	179,386		179,386
総合計	前連結会計年度	10,123,124	245,252	10,368,376
	当連結会計年度	10,408,537	200,899	10,609,437

(注) 1 流動性預金 = 当座預金 + 普通預金 + 貯蓄預金 + 通知預金

2 定期性預金 = 定期預金 + 定期積金

3 「国内業務部門」は、銀行業の国内店の円建取引であります。「国際業務部門」は、銀行業の国内店の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定等は国際業務部門に含めておりません。

(6) 国内・海外別貸出金残高の状況  
業種別貸出状況(未残・構成比)

業種別	前連結会計年度		当連結会計年度	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
国内(除く特別国際金融取引勘定分)	9,493,627	100.00	9,871,287	100.00
製造業	558,358	5.88	652,506	6.61
農業, 林業	18,254	0.19	20,598	0.21
漁業	12,591	0.13	11,666	0.12
鉱業, 採石業, 砂利採取業	14,121	0.15	14,285	0.14
建設業	186,304	1.96	203,881	2.07
電気・ガス・熱供給・水道業	229,533	2.42	256,604	2.60
情報通信業	33,682	0.35	35,104	0.36
運輸業, 郵便業	527,196	5.55	558,643	5.66
卸売業, 小売業	861,697	9.08	870,699	8.82
金融業, 保険業	460,806	4.85	452,481	4.58
不動産業, 物品賃貸業	1,965,370	20.70	2,142,087	21.70
その他各種サービス業	819,279	8.63	826,172	8.37
国・地方公共団体	1,572,244	16.56	1,581,654	16.02
その他	2,234,185	23.53	2,244,901	22.74
海外(特別国際金融取引勘定分)				
政府等				
合計	9,493,627		9,871,287	

(注) 「国内」とは、当行(特別国際金融取引勘定分を除く)及び連結子会社であります。「海外」とは、特別国際金融取引勘定分であります。

外国政府等向け債権残高(国別)

「外国政府等」とは、外国政府、中央銀行、政府関係機関又は国営企業であり、日本公認会計士協会銀行等監査特別委員会報告第4号に規定する特定海外債権引当勘定を計上している国の外国政府等の債権残高を掲げることとしております。ただし、前連結会計年度及び当連結会計年度の外国政府等向け債権残高は該当ありません。

(7) 国内業務部門・国際業務部門別有価証券の状況

有価証券残高(末残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
国債	前連結会計年度	1,296,439		1,296,439
	当連結会計年度	1,008,712		1,008,712
地方債	前連結会計年度	61,697		61,697
	当連結会計年度	54,758		54,758
社債	前連結会計年度	486,424		486,424
	当連結会計年度	442,550		442,550
株式	前連結会計年度	163,483		163,483
	当連結会計年度	132,541		132,541
その他の証券	前連結会計年度	95,824	283,624	379,448
	当連結会計年度	157,988	343,133	501,121
合計	前連結会計年度	2,103,870	283,624	2,387,494
	当連結会計年度	1,796,552	343,133	2,139,685

(注) 1 「国内業務部門」は、銀行業の国内店の円建取引及び国内連結子会社の円建取引であります。「国際業務部門」は、銀行業の国内店の外貨建取引及び連結子会社の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定等は国際業務部門に含めております。

2 「その他の証券」には、外国債券を含んでおります。

(8) 「金融機関の信託業務の兼営等に関する法律」に基づく信託業務の状況

連結会社のうち、「金融機関の信託業務の兼営等に関する法律」に基づき信託業務を営む会社は当行1社であります。

信託財産の運用 / 受入状況(信託財産残高表)

科目	資産			
	前連結会計年度末 (2018年3月31日)		当連結会計年度末 (2019年3月31日)	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
有価証券	129	41.38	129	42.38
現金預け金	183	58.62	176	57.62
合計	313	100.00	305	100.00

科目	負債			
	前連結会計年度末 (2018年3月31日)		当連結会計年度末 (2019年3月31日)	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
金銭信託	313	100.00	305	100.00
合計	313	100.00	305	100.00

(注) 元本補てん契約のある信託については、前連結会計年度末及び当連結会計年度末ともに取扱残高はありません。

有価証券残高の状況

	前連結会計年度末 (2018年3月31日)		当連結会計年度末 (2019年3月31日)	
	有価証券残高 (百万円)	構成比(%)	有価証券残高 (百万円)	構成比(%)
国債	59	46.00	59	46.00
地方債	69	54.00	69	54.00
合計	129	100.00	129	100.00

(自己資本比率の状況)

(参考)

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準(2006年金融庁告示第19号)に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。

当行は、国内基準を適用のうえ、信用リスク・アセットの算出においては、2019年3月31日から先進的内部格付手法を採用しております。なお、2018年3月31日は基礎的内部格付手法を採用しております。オペレーショナル・リスク相当額に係る額の算出は、粗利益配分手法を採用しております。

連結自己資本比率(国内基準)

(単位：億円、%)

	2018年3月31日	2019年3月31日
1. 連結自己資本比率(2 / 3)	9.03	9.71
2. 連結における自己資本の額	5,023	5,332
3. リスク・アセットの額	55,625	54,899
4. 連結総所要自己資本額(3 × 8%)	4,450	4,391

単体自己資本比率(国内基準)

(単位：億円、%)

	2018年3月31日	2019年3月31日
1. 単体自己資本比率(2 / 3)	8.54	9.18
2. 単体における自己資本の額	4,597	4,903
3. リスク・アセットの額	53,805	53,398
4. 単体総所要自己資本額(3 × 8%)	4,304	4,271

(資産の査定)

(参考)

資産の査定は、「金融機能の再生のための緊急措置に関する法律」(1998年法律第132号)第6条に基づき、当行の貸借対照表の社債(当該社債を有する金融機関がその元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が金融商品取引法(1948年法律第25号)第2条第3項に規定する有価証券の私募によるものに限る。)、貸出金、外国為替、その他資産中の未収利息及び仮払金、支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに貸借対照表に注記することとされている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は質貸借契約によるものに限る。)について債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として次のとおり区分するものであります。

1 破産更生債権及びこれらに準ずる債権

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権をいう。

2 危険債権

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権をいう。

3 要管理債権

要管理債権とは、3ヵ月以上延滞債権及び貸出条件緩和債権をいう。

4 正常債権

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、上記1から3までに掲げる債権以外のものに区分される債権をいう。

資産の査定額

債権の区分	2018年3月31日	2019年3月31日
	金額(億円)	金額(億円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	124	163
危険債権	1,041	992
要管理債権	379	419
正常債権	94,051	97,910

(注)単位未満は四捨五入しております。

(生産、受注及び販売の状況)

「生産、受注及び販売の状況」は、銀行業における業務の特殊性のため、該当する情報がないので記載しておりません。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当行グループの経営成績等の状況に関する分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度の末日現在において判断したものであります。

当行グループは、銀行業以外に一部で保証業務等を営んでおりますが、それらの事業の全セグメントに占める割合が僅少であるため、以下の経営者の視点による認識及び分析・検討内容については、福岡銀行(単体)の業績を記載しております。

(経営者の視点による認識及び分析・検討内容)

当年度の経営成績につきましては、マイナス金利政策が続く厳しい経営環境の中で、経常利益は前年比117億5千3百万円増加の687億6千2百万円、当期純利益は前年比98億8千万円増加の503億8百万円となり、一定の評価ができる水準となりました。

主要勘定残高につきましては、総貸出金が前年比3,857億円増加の9兆8,978億円、総資金(譲渡性預金を含む預金)が前年比2,489億円増加の10兆6,575億円となり、ともに前年度から着実に増加しております。また、有価証券は、金利環境等を踏まえ、国債等債券の償還再投資を抑制したことにより、前年比2,454億円減少の2兆1,492億円となりました。

ふくおかフィナンシャルグループの第5次中期経営計画において目標とする経営指標に照らした当行の経営実績は以下のとおりであります。

目標とする経営指標		当年度実績 (前年比)	認識及び分析・検討内容
収益性指標	当期純利益	503億円 (+99億円)	低金利環境と他社競合を背景とした貸出金利回りの低下影響を、事業性評価を軸としたコンサルティング営業の取組みによる貸出金残高の積み上げや預金金利の見直しなどにより、国内預貸金利息を前年比1億円の減少にとどめました。加えて市場取引、国際部門での収益積み上げにより、資金利益が前年比38億円の増加となりました。役務取引等利益につきましては、投資信託等預り資産関連手数料の減少を主因に、前年比13億円の減少となりました。経費につきましては、成長戦略を実現するために必要な投資は行いながらも、業務効率化を進めたことで前年から8億円の削減となりました。以上の結果、コア業務純益は、前年比37億円増加の650億円となりました。 当期純利益は、コア業務純益の増加に加え、有価証券の売却益等の計上等により、前年比99億円増加の503億円となりました。
	ROE(単体)	7.5% (+1.3%)	また、当期純利益の増加を主因とし、ROEは前年比+1.3%の7.5%となりました。 今後も、厳しい経営環境が続くことが想定されますが、業務改革に取組み生産性を向上させるとともに、多様化するお客さまの課題解決、ニーズに対応できるコンサルティング力の強化、有価証券投資の多様化などに取組み収益力を向上させていきます。また、信用リスクが大きく高まったというわけではありませんが、世界経済の先行き不透明感やクレジットサイクル転換の可能性など、今まで以上に注視が必要な状況となっており、管理体制の強化に取り組んでいきます。
成長性指標	総貸出金平残(単体) (注)	8.8兆円 (+0.3兆円)	総貸出金平残につきましては、中小企業向け貸出金や国際部門の貸出金を中心に着実に積み上げ、前年比0.3兆円(年率3.0%)増加の8.8兆円となりました。
	総資金平残(単体)	10.5兆円 (+0.3兆円)	総資金平残につきましては、個人預金・法人預金ともに堅調に推移し、前年比0.3兆円(年率3.3%)増加の10.5兆円となりました。
	預り資産残高(単体)	1.0兆円 (+0.0兆円)	預り資産残高につきましては、保険残高については着実に増加しましたが、投資信託について、マーケット相場が停滞するなかで販売が低調に推移したことに加え、時価下落の影響で残高が減少したため、前年並み水準の1.0兆円となりました。
健全性指標	自己資本比率(単体)	9.2% (+0.6%)	自己資本比率につきましては、利益計上により自己資本を積み上げるとともに、リスク管理を高度化し自己資本比率の算定をAIRBへ移行したことで、前年比0.6%上昇し、9.2%となりました。
効率性指標	OHR(単体)	50.3% (2.8%)	資金利益の増加や国債等債券売却益の計上により、業務粗利益が56億円増加したことに加え、業務効率化を進め経費を削減したことにより、OHRは前年比2.8%改善し、50.3%となりました。

(注) 総貸出金平残には、政府向け貸出金およびふくおかフィナンシャルグループ向け貸出金は含んでおりません。

(資本の財源及び資金の流動性)

当行グループの中核事業は銀行業であり、預金等によりお預りした資金を、貸出金及び有価証券等により運用しております。また、設備投資等は原則として自己資金により対応する予定であります。

キャッシュ・フローの状況は、「(1) 経営成績等の状況の概要」に記載しております。

(単体損益の概要)

(百万円)

	当年度	前年度	前年比
業務粗利益	132,878	127,272	5,606
資金利益	114,668	110,891	3,777
国内部門	106,975	103,473	3,502
国際部門	7,692	7,418	274
役務取引等利益	15,275	16,600	1,325
特定取引利益	6	6	0
その他業務利益	2,928	226	3,154
うち国債等債券損益	1,035	1,621	2,656
経費(除く臨時処理分)	66,810	67,600	790
実質業務純益	66,067	59,671	6,396
一般貸倒引当金繰入額	172	767	595
業務純益	66,240	60,439	5,801
コア業務純益	65,032	61,293	3,739
臨時損益等	2,522	3,429	5,951
不良債権処理額	2,237	1,985	252
うち個別貸倒引当金繰入額	2,087	2,800	713
うち貸倒引当金戻入益			
うち償却債権取立益	369	1,066	697
信用コスト( + )	2,064	1,217	847
株式等関係損益	5,080	723	4,357
その他臨時損益等	320	2,168	1,848
経常利益	68,762	57,009	11,753
特別損益	265	529	264
税引前当期純利益	68,497	56,480	12,017
法人税等合計	18,189	16,051	2,138
当期純利益	50,308	40,428	9,880

#### 4 【経営上の重要な契約等】

当行の親会社であるF F Gと株式会社十八銀行(以下「十八銀行」といいます。F F Gと十八銀行を併せ、以下「両社」といいます。)は、2016年2月26日に締結した基本合意書に基づき、2018年10月30日に開催したそれぞれの取締役会において、十八銀行の株主総会の承認及び関係当局の認可等を得られることを前提として、2019年4月1日を効力発生日とする株式交換(以下「本件株式交換」といいます。)による経営統合(以下「本件経営統合」といいます。)を行うことを決議し、同日、両社の間で株式交換契約書(以下「本件株式交換契約」といいます。)を締結いたしました。

本件経営統合および本件株式交換の内容は以下のとおりであります。

##### 1. 本件経営統合の目的

九州が一体となって魅力あるマーケットを形成していくために、広域経済圏において、スケールメリットを活かした業務の効率化を推進し、将来に亘り地域金融システムを安定させることで、「地域経済活性化と企業価値向上の同時実現」を目指すことを目的とするものです。

##### 2. 本件株式交換の方式、本件株式交換に係る割当ての内容

###### (1) 本件株式交換の方式

F F Gを株式交換完全親会社、十八銀行を株式交換完全子会社とする株式交換となります。なお、本件株式交換は、F F Gについては会社法第796条第2項の規定に基づく簡易株式交換の手続きにより株主総会の承認を得ることなく行っております。十八銀行については、2019年1月18日に開催した臨時株主総会にて、本件株式交換契約の承認を得ております。

###### (2) 株式交換に係る割当ての内容(交換比率)

	F F G	十八銀行
株式交換比率	1	1.12

###### (注) 1 株式交換に係る割当ての詳細

十八銀行の普通株式1株に対してF F Gの普通株式1.12株を割当て交付いたします。株式交換により、十八銀行の株主に交付されるF F Gの普通株式の数に1株に満たない端数が生じた場合には、会社法第234条その他関連法令の規定に従い、当該株主に対し1株に満たない端数部分に応じた金額をお支払いいたします。

###### 2 株式交換により、F F Gが交付した新株式数

普通株式：19,185,892株

###### 3 株式交換比率の算定方法

複数のフィナンシャル・アドバイザーに株式交換比率の算定を依頼し、提出された報告書に基づき当事者間で協議の上、算定しております。

###### 4 単元未満株式の取扱いについて

株式交換により、1単元(100株)未満のF F Gの普通株式(以下「単元未満株式」といいます。)の割当てを受けた十八銀行の株主の皆さまにつきましては、その保有する単元未満株式を株式会社東京証券取引所及び証券会員制法人福岡証券取引所その他の金融商品取引所において売却することはできません。そのような単元未満株式を保有することとなる株主の皆さまは、会社法第192条第1項の規定に基づき、F F Gに対し、自己の保有する単元未満株式を買い取ることを請求することが可能です。また、会社法第194条第1項及び定款の規定に基づき、F F Gが売渡しの請求に係る数の自己株式を有していない場合を除き、F F Gに対し、自己の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求することが可能です。

3. 株式交換完全親会社となる会社の概要

	株式交換完全親会社
名称	株式会社ふくおかフィナンシャルグループ
所在地	福岡県福岡市中央区大手門一丁目8番3号
代表者の役職・氏名	取締役会長兼社長 柴戸 隆成
事業内容	銀行業
資本金	124,799百万円
決算期	3月31日

4. 会計処理の概要

株式交換に伴う会計処理は、企業結合に関する会計基準における取得に該当し、F F Gを取得企業、十八銀行を被取得企業としてパーチェス法が適用されます。また、株式交換により発生するのれん(又は負ののれん)の金額に関しては、現段階では未定です。

5 【研究開発活動】

該当事項はありません。

### 第3 【設備の状況】

#### 1 【設備投資等の概要】

当行グループの銀行業における設備投資につきましては、お客さまの利便性向上及び業務の効率化を図るための店舗投資、機械化投資、システム関連投資等を行いました。これらの設備投資の総額は、5,345百万円であります。

なお、営業に重大な影響を及ぼすような設備の売却、撤去等はありません。

連結子会社においては、主要な設備の投資はありません。

#### 2 【主要な設備の状況】

当連結会計年度末における主要な設備の状況は次のとおりであります。

銀行業

(2019年3月31日現在)

会社名	店舗名 その他	所在地	設備の 内容	土地		建物	動産	リース 資産	合計	従業員数 (人)
				面積(m <sup>2</sup> )	帳簿価額(百万円)					
当行	本店	福岡市 中央区	店舗	4,142	17,281	6,208	213		23,703	83
	天神町支店 他52ヶ店	福岡 市内地区	店舗	48,346 (7,367)	18,323	5,524	541		24,389	755
	北九州営業部 他25ヶ店	北九州 市内地区	店舗	28,053 (4,482)	10,138	3,162	291		13,592	402
	久留米営業部 他8ヶ店	久留米 市内地区	店舗	9,460 (955)	2,227	639	46		2,912	127
	飯塚支店 他62ヶ店	福岡県内 その他地区	店舗	81,420 (7,732)	10,093	4,180	383		14,656	796
	福岡県計			171,424 (20,538)	58,064	19,715	1,475		79,255	2,163
	県外支店 (九州地区) (鹿児島営業部 他11ヶ店)	鹿児島県他	店舗	10,295	5,240	731	58		6,030	164
	県外支店 (その他) (東京支店 他5ヶ店)	東京都他	店舗	2,811	9,440	329	65		9,834	72
	本部ビル	福岡市 中央区	本部	4,619	3,631	4,455	353	1,991	10,431	1,319
	コンピューター センター	福岡市 博多区	コンピュー ターセンター	2,017	6,623	2,407	196		9,227	
	事務センター	福岡市 早良区	事務 センター	2,850	1,469	1,623	37		3,130	
	社宅・寮		社宅・寮	62,810	13,469	6,448	16		19,934	
	その他		その他	50,438 (378)	5,711	6,393	209		12,314	
	合計			307,266 (20,916)	103,650	42,103	2,413	1,991	150,159	3,718

その他

(2019年3月31日現在)

	会社名	店舗名 その他	所在地	設備 の内容	土地		建物	動産	リース 資産	合計	従業員数 (人)
					面積(m <sup>2</sup> )	帳簿価額(百万円)					
連結 子会社	福岡コンピューター サービス株式会社	本社等	福岡市 博多区他	本社等				35	106	141	155
	F F G証券株式会社	本店他 19ヶ店	福岡市 中央区他	店舗等	1,504	58	120	48		228	205
	その他	本社等	福岡市 中央区他	本社等			12	57	2	72	563
	合計				1,504	58	133	141	108	442	923

- (注) 1 当行の主要な設備の大宗は、店舗、事務センターであるため、銀行業に一括計上しております。  
2 土地の面積欄の( )内は、借地の面積(うち書き)であり、その年間賃借料は建物も含め1,515百万円であります。  
3 当行の動産は、事務機械830百万円、その他1,582百万円であります。  
4 当行の店舗外現金自動設備335ヶ所、海外駐在員事務所8ヶ所は上記に含めて記載しております。  
5 当行グループは、単一セグメントであるため、事業内容別の主要な設備の状況を記載しております。  
6 上記の他、リース契約による主な賃借設備は次のとおりであります。

	会社名	店舗名 その他	所在地	事業内容の 名称	設備の内容	従業員数 (人)	年間 リース料 (百万円)
当行		事務センター他	福岡市 早良区他	銀行業	事務機械他		448
連結 子会社	F F G証券株式会社他	本社等	福岡市 中央区他	その他	事務機械他		168

### 3 【設備の新設、除却等の計画】

当行及び連結子会社の設備投資については、投資対効果を十分に検討したうえで、お客さまの利便性向上、営業力強化、業務効率化を図るための機械化投資等を計画しております。

当連結会計年度末において計画中である重要な設備の新設、除却等は次のとおりであります。

#### (1) 新設、改修

会社名	店舗名 その他	所在地	区分	事業内容 の名称	設備の 内容	投資予定金額 (百万円)		資金 調達方法	着手年月	完了 予定年月
						総額	既支払額			
当行	コンピューターセンター	福岡市 博多区	改修等	銀行業	受変電 設備等	1,049	734	自己資金	2017年7月	2020年3月
	本店等		新設		事務機械	6,300				

- (注) 1 上記設備計画の記載金額には、消費税及び地方消費税を含んでおりません。  
2 事務機械の主なものは2020年3月までに設置予定であります。  
3 連結子会社については、主な設備計画はありません。

#### (2) 売却

重要な設備の売却については、該当ありません。

## 第4 【提出会社の状況】

### 1 【株式等の状況】

#### (1) 【株式の総数等】

##### 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	1,800,000,000
計	1,800,000,000

##### 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2019年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2019年6月27日)	上場金融商品取引所名又は 登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	739,952,842	同 左		株主としての権利内容に制限のない、標準となる株式。単元株式数は1,000株。
計	739,952,842	同 左		

#### (2) 【新株予約権等の状況】

##### 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

##### 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

##### 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

#### (3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

#### (4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2007年4月1日～ 2008年3月31日(注)	10,839	739,952	2,438	82,329	2,428	60,479

(注) 新株予約権の行使(旧商法に基づき発行された転換社債の株式への転換)による増加であります。

(5) 【所有者別状況】

2019年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数1,000株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)				1				1	
所有株式数(単元)				739,952				739,952	
所有株式数の割合(%)				100.00				100.00	

(6) 【大株主の状況】

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
株式会社ふくおか フィナンシャルグループ	福岡市中央区大手門一丁目8番3号	739,952	100.00
計		739,952	100.00

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2019年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)			
完全議決権株式(その他)	普通株式 739,952,000	739,952	株主としての権利内容に制限のない、標準となる株式。
単元未満株式	普通株式 842		同上
発行済株式総数	739,952,842		
総株主の議決権		739,952	

【自己株式等】

該当事項はありません。

## 2 【自己株式の取得等の状況】

### (1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

### (2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

### (3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

該当事項はありません。

### (4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

該当事項はありません。

## 3 【配当政策】

銀行の公共性に鑑み、長期的かつ安定的な経営基盤の確保や内部留保の充実による財務体質の強化などに努めるとともに、完全親会社であるF F Gの経営方針に従って、同社に対して配当を行う方針を採っております。当行の剰余金の配当は、中間配当及び期末配当の年2回を基本的な方針としております。配当の決定機関は、中間配当は取締役会、期末配当は株主総会としております。

また、当行は、「取締役会の決議によって毎年9月30日を基準日として中間配当を行うことができる。」旨を定款に定めておりますが、機動的な配当政策を図るため、「期末配当を除き、剰余金の配当その他会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めがある場合を除き、取締役会の決議によりこれを定めることができる」旨も定めております。

また、内部留保資金の用途につきましては、将来の事業発展及び財務体質の強化のための原資として活用してまいります。

(注)基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)
2018年11月12日 取締役会決議	10,729	14.50
2019年6月27日 定時株主総会決議	11,469	15.50

## 4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

### (1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当行は、高い人格と見識を備えた社外監査役2名を含む3名で構成される監査役会が、取締役の職務執行状況を適切に監査しており、十分に実効性を備えたガバナンス体制を構築していることから、現在の監査役制度を採用しております。

加えて、ガバナンス体制の更なる充実・強化のため、以下のような取組みを行っております。

- 1) 取締役の任期を1年とすることで、経営責任を明確化するとともに、株主意思を経営に反映しやすい体制としております。
- 2) 取締役会の意思決定の迅速化と業務遂行機能の強化を図るため、執行役員制度を導入しております。
- 3) 監査役の職務について効率性及び実効性を高めるため、監査役の職務を補助する監査役室を設置しております。

経営機構・業務機構の概要は以下のとおりであります。

取締役会及び取締役

取締役会は提出日現在12名の取締役で構成されており、法令・定款で定める事項のほか、経営に係る基本方針の協議・決定や業務執行等における重要な事項についての意思決定を行っております。

監査役会及び監査役

監査役会は提出日現在3名の監査役（うち社外監査役2名）で構成されており、監査に係る基本方針及び監査計画に基づき、取締役の職務執行状況の監査のほか、業務及び財産の状況等についての調査を行っております。

監査役室

監査役制度を有効に機能させるため、監査役をサポートする専属スタッフを配置しております。

経営会議・常務会

取締役会で定める基本方針や委嘱された事項に基づき、経営計画や業務計画等の業務執行に関する重要な事項を協議しております。

A L M委員会、コンプライアンス委員会、金融犯罪対策委員会、オペレーショナル・リスク管理委員会

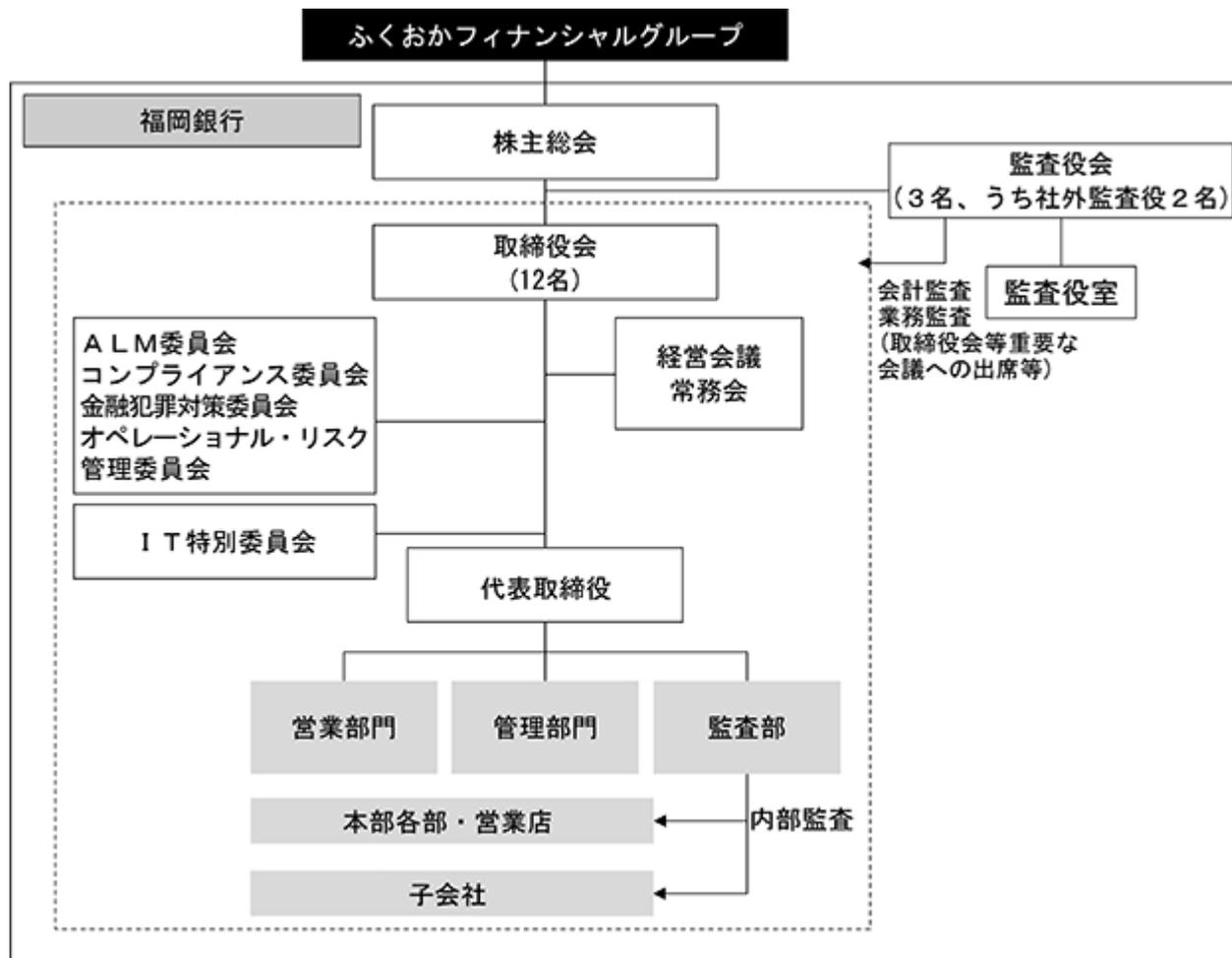
各種リスク管理態勢に係る協議のほか、資産ポートフォリオ管理、コンプライアンス、金融犯罪対策管理に関する事項等に関する協議・報告を行っております。

I T特別委員会

I Tガバナンスの強化を図るため、I T戦略やシステムリスク管理強化及びシステム投資等について協議しております。

執行役員

取締役会の意思決定の迅速化と業務執行機能の強化を図るため、取締役会の決議により執行役員を選任し、業務執行を委嘱しております。



企業統治に関するその他の事項

内部統制システムの整備状況

当行では、取締役会を経営全般や業務執行に係る最高意思決定機関とし、内部統制システムに係る基本方針等の業務執行の基本方針、経営計画・業務計画等の決定のほか、リスク管理、財務・管理会計のルールや内部監査態勢等内部管理体制の構築・整備を行っております。

当行グループにおける内部統制システムの主な整備状況は、次のとおりであります。

(コンプライアンス態勢について)

当行では、法令等遵守を経営の最重要課題のひとつと位置付け、コンプライアンス態勢の充実と強化に取り組んでおります。

具体的には、コンプライアンス統括部署を設置し、関係部署と連携して各種法令等に則った業務処理が行われているかをチェックする態勢を整備しております。コンプライアンスに関する基本的な価値観、精神、行動基準を示した「コンプライアンス憲章」を制定するとともに、倫理規程、行内ルール及び法令等を収録した「コンプライアンス・マニュアル」を制定し、研修指導等により周知徹底しております。

また、取締役会の下部組織として「コンプライアンス委員会」及び「金融犯罪対策委員会」を設け、コンプライアンス及び金融犯罪対策に係る態勢の評価・チェックを定期的に行うとともに、事業年度ごとのコンプライアンスに係る重点課題や活動計画を「コンプライアンス・プログラム」として定め、グループ全体のコンプライアンス態勢の着実な整備を行い、実効性を高めることとしております。

(リスク管理態勢について)

当行では、健全性維持と収益力向上の双方がバランス良く両立し得る経営を目指し、リスク管理態勢の強化に取り組んでおります。

具体的には、リスク管理を実施する際の基本規程として「リスク管理方針」を、事業年度ごとのリスク管理に係る重点課題や活動計画として「リスク管理プログラム」を制定し、リスク管理を実践しております。

また、取締役会の下部組織として「ALM委員会」、「オペレーショナル・リスク管理委員会」を設け、各種リスクの管理及び統合的リスク管理の状況等について、定期的に経営に対して報告・協議を行っております。

(内部統制システムに係る基本方針)

当行は、会社法の規定に基づき、取締役会において「内部統制システムに係る基本方針」を以下のとおり決議するとともに、継続的な体制の見直しを行うことにより、内部統制の充実強化を図っていくこととしております。

1. 本基本方針の目的

本基本方針は、取締役会が、当行及び当行グループを取り巻くリスクに適時適切に対応し、企業価値の持続的成長を実現するため、経営理念及び行動規範を策定し、併せてこれらを役職員へ浸透させることに努めるとともに、法令等遵守態勢、リスク管理態勢及び財務報告の信頼性を確保する態勢等を確立して、当行及び当行グループの内部統制システムの充実・強化を図ることを目的として制定する。

2. 取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

1) (法令等遵守の基本方針)

取締役会は、取締役の当行及び当行グループに係る職務の執行が法令及び定款に適合するための体制その他当行グループの業務の適正に必要な体制を確保し、また、その整備・充実を図るものとする。

2) (社外取締役等の選任)

当行グループと直接関係のない独立の社外取締役、又は業務執行を行わない非業務執行取締役を社外から選任することにより、外部の視点による監督機能の維持・向上を図るものとする。

3. 取締役の職務の執行に係る情報の保存・管理に関する体制

(業務執行に係る情報及び会議議事録の保管)

取締役会は、取締役の職務の執行に関して、取締役が責任及び義務を果たしたことを検証するために十分な情報を相当期間保存・管理する体制を確保するため、株主総会、取締役会等取締役が関与する重要会議の議事録を作成し、関連する資料とともに保存するものとする。

また、当行業務に係る各文書の保存方法は別途文書保存に関する規程を定め、これに基づき保管するものとする。

4. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

1) (取締役会の決定事項)

取締役会は、その決定事項について法令に定めのあるもののほか、定款及び取締役会規則に定めるものとする。

2) (業務執行の委嘱)

取締役会は、業務を効率的に運用することにより実効性を高めるため、その決定により、代表取締役以外の取締役及び執行役員に業務執行を委嘱するものとする。

3) (業務執行に係る決定権限)

取締役会は、取締役会以外で経営陣を構成員とする委員会及び常務会並びに取締役及び執行役員の業務執行権限を、稟議等決定基準において定める。

5. 当行グループの損失の危険の管理に関する規程その他の体制

1) (リスク管理の統括部署)

取締役会は、当行グループの統合的なリスク管理態勢を確立するため、内規によってリスク管理の統括部署を定め、統合的なリスク管理機能及び相互牽制機能を確保し、また、危機発生に備えた基本方針を定めるなど必要な体制を確保する。

2) (リスク管理に係る諸規程の策定)

取締役会は、業務の適切性及び健全性を確保するため、リスク管理に関する組織体制、リスクの把握・評価・報告の方法、リスク管理に関する監査部署など基本的事項を定めた管理規則を策定するほか、事業年度ごとのリスク管理プログラムを策定し、リスク管理に関する業務執行について、経営陣の参加するリスク管理委員会等においてリスク管理のモニタリングを実施する。

3) (実効的なリスク管理の確保)

取締役会は、網羅的かつ実効的なリスク管理を行うため、リスクを特性に応じて分類・管理するものとし、リスクのモニタリングやリスクコントロールの機動的な態勢を確保するため、内規によって必要に応じてリスクカテゴリー毎の関連部署を定めることとする。

4) (コンティンジェンシープラン)

取締役会は、損失の危機発生に対応するための緊急措置、行動基準を定め、役職員の人命の安全及び当行の財産の確保並びに主要業務の継続を目的とし、危機管理体制を確保するものとする。

5) (リスク管理に対する監査体制)

取締役会は、内規によって業務執行ラインから独立した内部監査部門を定め、リスク所管部署のリスク管理態勢の適切性及び有効性を検証する体制を構築し、適時適切に取締役会へ報告させるとともに、外部監査機関と連携してリスク管理体制の充実強化を図るものとする。

6. 当行グループの財務報告の適正性を確保するための体制

取締役会は、当行グループの財務報告の適正性を確保するため、財務報告に係る内部統制を整備及び運用するための規程を定める。

7. 当行グループの役職員の職務の執行が法令・定款に適合することを確保するための体制

1) (コンプライアンス態勢の整備)

取締役会は、法令等遵守を経営の最重要課題のひとつとして位置付け、コンプライアンスに関するグループ共通の基本的な価値観、精神、行動基準を示したコンプライアンス憲章を制定するとともに、内規によってコンプライアンスに関する統括部署を設置し、法令等遵守のための体制構築のための基本的な方針・規則等を定める。

2) (コンプライアンス・プログラム)

取締役会は、下部組織としてコンプライアンス委員会を設置し、コンプライアンス態勢の評価・チェックを定期的に行うとともに、事業年度ごとの法令等遵守に係る重点課題や活動計画をコンプライアンス・プログラムとして定め、グループ全体のコンプライアンス態勢の着実な整備を行い、実効性を高める。

3) (法令等遵守態勢の検証)

取締役会は、内部監査部門に対して、当行グループのコンプライアンスに関する管理態勢の有効性及び適切性を検証させ、その結果の報告を受けるものとする。

4) (反社会的勢力の排除)

取締役会は、法令等遵守に関する基本方針である「コンプライアンス憲章」において、反社会的勢力への対応方針を定め、市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力および団体に対しては、毅然とした態度を貫き、反社会的勢力等との関係を遮断するための体制を整備する。

8. その他企業集団における業務の適正を確保するための体制

1) (関連会社の運営・管理部署)

取締役会は、当行グループの健全かつ円滑な運営を行うため、関連会社の運営及び管理に関する規程を定める。また、内規によって関連会社の運営を管理する部署を設置する。

2) (関連会社に関する協議・報告基準)

取締役会は、関連会社の効率的かつ適切な運営を確保するため、法令等の範囲内において、関連会社の運営に関する協議、事前承認及び報告に関する基準を定める。

9. 監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における(監査役を補助すべき)使用人に関する体制

1) (監査役室の設置)

取締役会は、監査役の職務について効率性及び実効性を高めるため、監査役の職務を補助する所管部署を監査役室として設置する。

2) (監査役室の担当者)

監査役室の担当者は、当行グループの業務に精通し、十分検証ができる者とする。

10. 監査役を補助すべき使用人の取締役からの独立性及び当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項(監査役室の独立性及び監査役室への指示の実効性)

監査役室は監査役の指揮監督下に置くものとし、また、同室担当者の人事異動については、事前に監査役と十分協議するものとする。

11. 当行グループの役職員が監査役（又は監査役会）に報告するための体制その他の監査役（又は監査役会）への報告に関する体制

1) (監査役への報告体制)

当行グループの役職員は、当行グループに著しい損害を及ぼす事実を発見した場合、又はその発生の恐れがある場合は監査役に対して、その事実等を書面又は口頭で報告できるものとする。

2) (監査役監査への協力)

監査役は、必要に応じていつでも取締役及び執行役員並びに使用人等当行グループの役職員に対して報告を求めることができ、報告を求められた役職員は適切に対応し協力しなければならない。

12. 監査役へ報告した者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制

11.の報告を行った当行グループの役職員は、当該報告をしたことを理由として、不利益取扱い等を受けることはない。万一、不利益取扱い等が確認された場合は、直ちに中止するように命じるとともに、不利益取扱いを行った者等の処分を検討する。

13. 監査役の職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に関する事項

監査役がその職務の執行について、当行に対し、会社法第388条に基づく費用の前払い等の請求をしたときは、当該請求に係る費用又は債務が職務の執行に必要でないと認められた場合を除き、速やかに当該費用又は債務を負担する。

14. その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制

1) (監査役取締役会への出席義務)

監査役は、取締役会に出席し、必要があると認めるときは意見を述べなければならない。

2) (監査役の重要会議への出席)

監査役は、常務会、経営会議及び業務執行に関する委員会に出席し、意見を述べることができる。

3) (会計監査人、代表取締役との連携)

監査役は、会計監査人、代表取締役と定期的な会合を実施し意見交換を行う。

4) (内部統制部門等との連携)

監査役は、コンプライアンス所管部門、リスク管理所管部門その他内部統制機能を所管する社内部署並びに内部監査部門と定期的な会合を実施し意見交換を行う。

(業務の適正を確保するための体制の運用状況の概要)

当行は、「内部統制システムに係る基本方針」に基づき、内部統制システムの整備とその適切な運用に努めております。当事業年度における運用状況の概要は以下のとおりです。

1. 取締役の職務の執行の適正及び効率性の確保に係る運用状況

複数の非業務執行取締役及び監査役も出席する取締役会（11回開催）において、法令及び定款に定める事項のほか、経営に係る基本方針の協議・決定や、業務執行等における重要な事項についての意思決定を行うとともに、取締役及び執行役員の職務の執行を監督しました。

2. リスク管理に係る運用状況

リスク管理に係る重点課題や活動計画である「2018年度リスク管理プログラム」を取締役会において策定し、当行グループ全体のリスク管理態勢の強化・高度化に取り組みました。

上記の取り組み状況については、経営陣が参加するALM委員会（毎月開催）及びオペレーショナル・リスク管理委員会（4回開催）においてモニタリングを実施し、リスク管理所管部門が取締役会に報告したほか、業務執行ラインから独立した内部監査部門がリスク管理態勢の適切性及び有効性を検証し、取締役会に報告しました。

### 3. コンプライアンスに係る運用状況

コンプライアンスに係る重点課題や活動計画である「2018年度コンプライアンス・プログラム」を取締役会において策定し、当行グループ全体のコンプライアンス態勢及び顧客保護等管理態勢の充実・強化に取り組みました。

上記の取り組み状況については、経営陣が参加するコンプライアンス委員会（4回開催）において評価・チェックを実施し、コンプライアンス所管部門が取締役会に報告したほか、業務執行ラインから独立した内部監査部門がコンプライアンスに関する管理態勢の適切性及び有効性を検証し、取締役会に報告しました。

### 4. グループ会社の運営・管理に係る運用状況

取締役会が定める基準に基づき、グループ会社の運営に関する協議及び事前承認を適時適切に実施するとともに、運営の状況を取締役会に報告しました。

### 5. 監査役監査の実効性の確保に係る運用状況

監査役は、取締役会、常務会、経営会議及び業務執行に関する委員会に出席し、業務執行が適切に行われていることを確認するとともに、適時適切に意見を述べております。

また、監査役は、会計監査人及び代表取締役を含む取締役との意思疎通や、他の監査役、内部監査部門及び内部統制機能の所管部署等との連携により必要かつ十分な情報を収集するとともに、必要に応じて外部専門家の助言を得るなど、監査役監査の実効性の確保に努めております。

## 責任限定契約の概要

当行は、定款において取締役（業務執行取締役である者を除く）及び社外監査役の責任限定契約に関する規定を設けております。当該定款に基づき当行が取締役（業務執行取締役である者を除く）及び社外監査役の全員と締結した責任限定契約の内容の概要は次のとおりであります。

### （取締役の責任限定契約）

取締役（業務執行取締役である者を除く）は、本契約締結後、会社法第423条第1項に定める責任について、その職務を行うにあたり善意にしてかつ重大な過失がないときは、会社法第425条第1項に定める最低責任限度額を限度として当行に対して損害賠償責任を負うものとする。

### （社外監査役の責任限定契約）

社外監査役は、本契約締結後、会社法第423条第1項に定める責任について、その職務を行うにあたり善意にしてかつ重大な過失がないときは、会社法第425条第1項に定める最低責任限度額を限度として当行に対して損害賠償責任を負うものとする。

定款で取締役の定数又は取締役の資格制限について定め、また、取締役の選解任等の決議要件につき、会社法と異なる別段の定めをした場合の内容

### （取締役の定数）

当銀行の取締役は、13名以内とする。

### （取締役の任期）

取締役の任期は、選任後1年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会の終結の時までとする。

### （取締役の選任決議要件）

- 1) 取締役は、株主総会において選任する。その選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う。
- 2) 取締役の選任決議は、累積投票によらない。

株主総会決議事項を取締役会で決議することができることとした場合のその事項及びその理由、取締役会決議事項を株主総会では決議できないことを定款で定めた場合のその事項及びその理由並びに株主総会の特別決議要件を変更した場合のその内容及びその理由

### （剰余金の配当等）

当行では、機動的な配当政策及び資本政策を実施するため、剰余金の配当等について以下のとおり定款に定めております。

#### 剰余金の配当等の決定機関

当銀行は、期末配当についての決議は株主総会により行う。期末配当を除き、剰余金の配当その他会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めがある場合を除き、取締役会の決議によりこれを定めることができる。

#### 剰余金の配当の基準日

- 1) 当銀行は、株主総会の決議によって、毎年3月31日を基準日として期末配当を行う。
- 2) 当銀行は、取締役会の決議によって、毎年9月30日を基準日として中間配当を行うことができる。
- 3) 1)、2)のほか、当銀行は、取締役会の決議によって剰余金の配当を行うことができる。

### （株主総会の特別決議要件）

当行では、株主総会を円滑に運営するため、株主総会の特別決議要件について以下のとおり定款に定めております。

#### 決議の方法

会社法第309条第2項の規定によるべき株主総会の決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う。

役員の報酬等の内容

イ 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針

取締役及び監査役の報酬については、株主総会の決議により、取締役全員及び監査役全員のそれぞれの報酬総額の最高限度額を決定しております。各取締役の報酬は、取締役会の諮問を受けたF F Gグループ報酬諮問委員会が、F F Gグループの「取締役等の報酬の決定方針」に基づき審議し、取締役会がその審議結果を尊重して決定いたします。各監査役の報酬は、監査役会の協議により決定いたします。

また、取締役に対しては、基本報酬に加え、下表に基づく当期純利益水準を指標とした業績連動報酬を導入しております。

当期純利益水準	報酬総枠
～100億円以下	0
100億円超～200億円以下	7,000万円
200億円超～250億円以下	8,000万円
250億円超～300億円以下	1億円
300億円超～350億円以下	1億1,000万円
350億円超～400億円以下	1億3,000万円
400億円超～450億円以下	1億4,000万円
450億円超～	1億6,000万円

当期純利益は、業績連動型報酬を費用処理後、税引後のものです。

ロ 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)		対象となる 役員の員数 (名)
		固定報酬	業績連動報酬	
取締役 (社外取締役を除く)	363	227	135	11
監査役 (社外監査役を除く)	25	25		1
社外役員	14	14		2

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性15名 女性0名 (役員のうち女性の比率0%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(千株)
取締役会長兼頭取 (代表取締役)	柴戸 隆成	1954年3月13日生	1976年4月 福岡銀行入行 2003年6月 同 取締役総合企画部長 2005年4月 同 常務取締役 2006年6月 同 取締役常務執行役員 2007年4月 同 取締役専務執行役員 2007年4月 ふくおかフィナンシャルグループ 取締役 2009年4月 同 取締役執行役員 2010年4月 福岡銀行取締役副頭取 2011年4月 親和銀行非業務執行取締役 2012年4月 ふくおかフィナンシャルグループ 取締役副社長(執行役員兼務) 2014年6月 同 取締役社長(執行役員兼務) 2014年6月 福岡銀行取締役頭取 2019年4月 ふくおかフィナンシャルグループ 取締役会長兼社長(執行役員兼務)(現任) 2019年4月 福岡銀行取締役会長兼頭取(現任)	2019年6月 から1年	
取締役副頭取 (代表取締役)	吉田 泰彦	1957年2月26日生	1979年4月 福岡銀行入行 2007年7月 同 執行役員総合企画部長 2007年10月 同 執行役員経営管理部長 2009年4月 同 執行役員本店営業部長 2011年4月 同 取締役常務執行役員 2011年4月 ふくおかフィナンシャルグループ 執行役員 2012年6月 同 取締役執行役員 2014年4月 福岡銀行取締役専務執行役員 2014年4月 親和銀行非業務執行取締役 2017年4月 福岡銀行取締役副頭取(現任) 2018年4月 親和銀行非業務執行取締役 2019年4月 ふくおかフィナンシャルグループ 取締役副社長(執行役員兼務)(現任)	2019年6月 から1年	
取締役副頭取 (代表取締役) 北九州代表、 九州営業本部長	白川 祐治	1957年1月12日生	1981年4月 福岡銀行入行 2009年4月 同 執行役員北九州営業部長 2011年4月 同 取締役常務執行役員北九州本部長 2013年4月 同 取締役常務執行役員 2013年4月 ふくおかフィナンシャルグループ 執行役員 2014年4月 福岡銀行取締役専務執行役員 2014年6月 ふくおかフィナンシャルグループ 取締役執行役員 2017年4月 福岡銀行取締役副頭取(現任) 2017年4月 熊本銀行非業務執行取締役(現任) 2019年4月 ふくおかフィナンシャルグループ 取締役副社長(執行役員兼務)(現任)	2019年6月 から1年	

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数(千株)
取締役副頭取 (代表取締役)	森川 康 朗	1958年2月4日生	1981年4月 2010年4月 2011年7月 2012年4月 2012年4月 2014年6月 2016年4月 2017年4月 2019年4月 2019年4月	福岡銀行入行 同 執行役員経営管理部長 同 執行役員経営管理部長兼クオリティ統括部長 同 取締役常務執行役員 ふくおかフィナンシャルグループ執行役員 同 取締役執行役員(現任) 福岡銀行取締役専務執行役員 親和銀行取締役副頭取 福岡銀行取締役副頭取(現任) 親和銀行非業務執行取締役(現任)	2019年6月 から1年	
取締役副頭取 (代表取締役)	横田 浩 二	1958年5月24日生	1982年4月 2011年4月 2011年4月 2013年4月 2014年4月 2014年4月 2017年4月 2017年4月 2017年6月 2019年4月	福岡銀行入行 同 執行役員営業推進部長 ふくおかフィナンシャルグループ執行役員 福岡銀行常務執行役員 同 取締役常務執行役員 熊本銀行非業務執行取締役 福岡銀行取締役専務執行役員 親和銀行非業務執行取締役 ふくおかフィナンシャルグループ取締役執行役員(現任) 福岡銀行取締役副頭取(現任)	2019年6月 から1年	
取締役常務執行役員 営業統括部長	田上 裕 二	1960年9月30日生	1984年4月 2014年4月 2015年4月 2017年4月 2017年4月 2019年4月 2019年4月	福岡銀行入行 同 執行役員総合企画部長 同 執行役員市場営業部長 同 取締役常務執行役員 ふくおかフィナンシャルグループ執行役員 同 執行役員営業統括部長(現任) 福岡銀行取締役常務執行役員営業統括部長(現任)	2019年6月 から1年	
取締役常務執行役員	五島 久	1962年2月3日生	1985年4月 2015年4月 2016年10月 2017年4月 2017年4月 2019年4月	福岡銀行入行 同 執行役員営業推進部長 同 執行役員営業戦略部長兼FC推進部長 同 常務執行役員 ふくおかフィナンシャルグループ執行役員(現任) 福岡銀行取締役常務執行役員(現任)	2019年6月 から1年	

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数(千株)
取締役常務執行役員 北九州本部長	立花 秀樹	1962年7月15日生	1985年4月 2015年4月 2017年4月 2018年4月 2019年6月	福岡銀行入行 同 執行役員本店営業部長 同 常務執行役員福岡地区本部長 同 常務執行役員北九州本部長 同 取締役常務執行役員北九州本部長(現任)	2019年6月 から1年	
取締役常務執行役員	林 秀之	1963年1月25日生	1985年4月 2015年4月 2015年6月 2017年4月 2019年4月 2019年6月 2019年6月	福岡銀行入行 同 執行役員鹿児島支店長 同 執行役員鹿児島営業部長 同 常務執行役員本店営業部長 同 常務執行役員 同 取締役常務執行役員(現任) ふくおかフィナンシャルグループ 執行役員(現任)	2019年6月 から1年	
取締役常務執行役員	三好 啓司	1962年6月18日生	1986年4月 2017年4月 2017年4月 2018年4月 2019年4月	福岡銀行入行 同 執行役員総合企画部長 ふくおかフィナンシャルグループ 執行役員(現任) 福岡銀行執行役員 同 取締役常務執行役員(現任)	2019年6月 から1年	
取締役	深沢 政彦	1960年11月25日生	1984年4月 1993年4月 2002年5月 2007年1月 2012年5月 2014年2月 2016年6月 2016年6月	㈱住友銀行(現㈱三井住友銀行)入 行 A.T. カーニー入社 同 日本代表(2005年より韓国会 長兼務) 同 中国会長 アリックスパートナーズ・アジ ア・LLC日本共同代表 同 アジア共同代表兼日本共同代 表(現任) ふくおかフィナンシャルグループ 社外取締役(現任) 福岡銀行非業務執行取締役(現任)	2019年6月 から1年	
取締役	小杉 俊哉	1958年7月30日生	1982年4月 1991年8月 1992年10月 1994年8月 2010年5月 2016年4月 2017年6月 2017年6月 2017年6月	日本電気㈱入社 米マッキンゼー・アンド・カンパ ニー入社 ユニデン㈱人事総務部長 アップルコンピュータ㈱人総務本 部長兼米アップル社人事担当ディ レクター 合同会社THS経営組織研究所代表 社員(現任) 慶應義塾大学大学院理工学研究科 特任教授(現任) ふくおかフィナンシャルグループ 社外取締役(現任) 福岡銀行非業務執行取締役(現任) エスペック㈱社外取締役(現任)	2019年6月 から1年	

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
監査役 (常勤)	権 藤 尚 彦	1959年 5月12日生	1983年 4月 2013年 4月 2014年 4月 2017年 4月	福岡銀行入行 同 執行役員人事部長 同 執行役員県南地区本部長 同 監査役(現任)	2019年 6月 から 4年	
監査役	貫 正 義	1945年 1月27日生	1968年 4月 2000年 6月 2003年 7月 2007年 6月 2009年 6月 2010年 6月  2010年 6月 2012年 4月 2018年 6月	九州電力(株)入社 同 広報部長 同 執行役員鹿児島支店長 同 取締役常務執行役員 同 代表取締役副社長 ふくおかフィナンシャルグループ 社外監査役 福岡銀行社外監査役(現任) 九州電力(株)代表取締役会長 同 相談役(現任)	2017年 6月 から 4年	
監査役	竹 島 和 幸	1948年11月23日生	1971年 4月 2003年 6月 2005年 6月 2007年 6月 2008年 6月 2013年 6月 2015年 6月 2017年 6月	西日本鉄道(株)入社 同 取締役都市開発事業本部長 同 常務取締役 同 取締役専務執行役員 同 代表取締役社長 同 代表取締役会長 福岡銀行社外監査役(現任) 西日本鉄道(株)取締役会長(現任)	2019年 6月 から 4年	
計						

(注) 1 取締役深沢政彦及び小杉俊哉は、非業務執行取締役であります。

2 監査役貫正義及び竹島和幸は、会社法第 2 条第16号に定める社外監査役であります。

(参考)

当行は、取締役会の意思決定の迅速化と業務執行機能の強化を図るため、執行役員制度を導入しております。2019年6月27日現在の執行役員(取締役を兼務する執行役員を除く)は次のとおりであります。

田代 信行 常務執行役員 福岡地区本部長  
小林 智 常務執行役員  
中島 秀明 東京支店長  
古江 寿則 県南地区本部長  
村本 慶次郎 筑豊地区本部長  
林 敬恭  
藤野 啓介 黒崎支店長  
一番ヶ瀬 達吉 鹿児島営業部長  
谷川 浩二  
牛島 智之  
高田 洋 本店営業部長

#### 社外役員の状況

当行は社外監査役 2 名を選任しておりますが、いずれも当行及び当行グループの出身者ではありません。

社外監査役の貫正義氏及び竹島和幸氏は、当行グループと一般預金者としての定常的な取引があります。また、貫正義氏は、当行グループと資本的關係及び取引關係のある会社の相談役、竹島和幸氏は、当行グループと資本的關係及び取引關係のある会社の取締役であります。資本的關係及び取引内容はいずれも定常的なものであり、個人が直接利害關係を有するものではありません。

社外監査役 2 名については、F F G が定める独立性判断基準の各要件を満たしており、独立性に問題はありませぬ。公正不偏の態度をもって中立的・客観的な視点から経営執行等の適法性の監査を行うとともに、これまでの豊富な経験及び見識等を活かして取締役会に対する有益なアドバイスを行うことにより、社会的信頼に応える良質なコーポレートガバナンス体制の確立に貢献していただけるものと考え、社外監査役に選任しております。

これらの社外監査役は、取締役会や監査役会等を通じて内部監査、監査役監査及び会計監査と相互に連携し、また内部統制部門から各種報告を受けて内部統制の状況を把握するなど、適切な監督、監査態勢を構築しております。

(3) 【監査の状況】

当行の監査部、監査役及び会計監査人は、以下のとおり、緊密な相互連携を保っております。また、これらの監査は、当行の内部統制機能を所管する社内部署とも連携し、効率的かつ実効的な監査を実施しております。

監査役監査の状況

当行の監査役会は、社外監査役2名を含む3名で構成されており、それを支える組織として監査役室を設置し専属のスタッフを配置しております。

監査役は、取締役会や経営会議等の重要な会議への出席、本部・関連会社に対するヒアリング、営業店往査、重要文書の閲覧等を通じて取締役の職務執行全般に関する監査を実施しております。また、以下のとおり、内部監査部門、会計監査人等と緊密な相互連携を保ち、積極的に意見及び情報の交換を行い、効率的かつ実効的な監査役監査に努めております。

内部監査部門

取締役会等において定期的に内部監査の実施状況について報告を受けるほか、原則として毎月ヒアリングを実施し、必要に応じて調査・説明を求めることとしております。

会計監査人

監査計画の説明、中間・年度監査の結果報告等、定期的に会計監査の実施状況について説明・報告を受け、意見交換を行うほか、必要に応じて往査への立会いを実施しております。

内部監査の状況

当行は、行内の他の部門から独立した監査部を設置しております。また、当行の内部監査は、親会社であるF F Gの監査部が実施しております。

当行監査部の人員は専任の部長を除き、全員F F G監査部へ出向して監査業務に従事しており、2019年3月末現在で41名（F F G監査部専任18名、当行監査部との兼任22名、当行監査部専任1名）となっております。

当行監査部は、F F G監査部による監査実施を受けて、内部統制及びリスク管理態勢の適切性及び有効性を検証し、問題点の指摘のみならず、改善方法の提言を行っております。監査結果については、定期的に取締役会等に報告しております。また、監査役や会計監査人とも緊密な相互連携を保っております。

会計監査の状況

イ 監査法人の名称、業務を執行した公認会計士

監査法人の名称	業務を執行した公認会計士	
EY新日本有限責任監査法人 (注)	指定有限責任社員・ 業務執行社員	三 浦 昇 藤 井 義 博 永 里 剛

(注) 新日本有限責任監査法人は、2018年7月1日付でEY新日本有限責任監査法人に名称を変更しております。

ロ 当行の会計監査業務に係る補助者の構成

公認会計士17名 その他31名

ハ 監査法人の選定方針と理由

当行の監査役会は、会計監査人の選定にあたり、「会計監査人の評価及び選定基準」を定めております。

なお、会社法施行規則第126条第4号に定めのある「会計監査人の解任又は不再任の決定の方針」につきましては、次のとおり定めております。

- ・会計監査人が、会社法第340条第1項各号に定める事由に該当し、当行の監査業務に重大な支障を来たすことが予想される場合は、監査役全員の同意により会計監査人を解任する。
- ・会計監査人の適格性に問題があると判断する場合、その他会計監査人が職務を適正に遂行することが困難と認められる等の場合には、監査役会の決定に基づき、会計監査人の解任又は不再任に関する議案を株主総会に提出する。

上記の基準に基づき、問題がないと判断したことから、監査法人の再任を決定しております。

二 監査役及び監査役会による監査法人の評価

当行の監査役会は、監査法人に対して評価を行っております。この評価については、「会計監査人の評価及び選定基準」で定める項目、 . 法定解任事由の有無（会社法第340条に定める解任事由の有無）、 . 会計監査人の監査体制、独立性及び専門性等、 . 会計監査人の職務遂行状況 について、確認・検証を行っております。

監査報酬の内容等

イ 監査公認会計士等に対する報酬の内容

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	59	0	59	0
連結子会社	19	1	19	1
計	78	1	78	1

当行が監査公認会計士等に対して支払っている非監査業務の内容は、住宅ローン証券化に関するモニタリング業務であります。

ロ 監査公認会計士等と同一のネットワークに対する報酬（イを除く）

当行及び当行の連結子会社の一部は、当行の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているEYのメンバーファームに対して、非監査業務に基づく報酬（税務アドバイザー業務等）として、前連結会計年度0百万円、当連結会計年度1百万円支払っております。なお、監査証明業務に基づく報酬の支払は、該当ありません。

ハ その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

二 監査報酬の決定方針

該当事項はありません。

ホ 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査役会は、会計監査人及び関係部署等から必要な資料を入手しかつ報告を受けて、会計監査人の監査計画の内容の適切性、監査時間の妥当性を確認するとともに、会計監査の職務遂行状況や監査担当者を評価し、加えて、非監査業務の委託状況及びその報酬の妥当性等を確認したうえで、会計監査に係る報酬見積り算出根拠が適切であると判断し、会計監査人の報酬等について同意しております。

(4) 【役員の報酬等】

該当事項はありません。

(5) 【株式の保有状況】

該当事項はありません。

## 第5 【経理の状況】

- 1 当行の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1976年大蔵省令第28号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(1982年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 2 当行の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1963年大蔵省令第59号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(1982年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 3 当行は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)の連結財務諸表及び事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)の財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人の監査証明を受けております。  
なお、従来、当行が監査証明を受けている新日本有限責任監査法人は、2018年7月1日に名称を変更し、EY新日本有限責任監査法人となりました。
- 4 当行は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ当行の親会社である株式会社ふくおかフィナンシャルグループが加入し、各種情報を取得するとともに、監査法人及び各種団体が主催するセミナー等に参加しております。

## 1 【連結財務諸表等】

## (1) 【連結財務諸表】

## 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
<b>資産の部</b>		
現金預け金	8 3,475,808	8 3,524,620
コールローン及び買入手形	409,661	838,769
買入金銭債権	63,784	66,527
特定取引資産	1,678	1,372
金銭の信託	4,113	4,190
有価証券	1, 2, 8, 9, 15 2,387,494	1, 8, 9, 15 2,139,685
貸出金	3, 4, 5, 6, 7, 8, 9 9,493,627	3, 4, 5, 6, 7, 8, 9 9,871,287
外国為替	7 5,094	7 5,267
その他資産	8 147,691	8 152,121
有形固定資産	11, 12 152,950	11, 12 151,851
建物	42,003	42,237
土地	10 102,555	10 102,675
リース資産	2,376	2,099
建設仮勘定	2,024	1,250
その他の有形固定資産	3,990	3,588
無形固定資産	11,354	11,797
ソフトウェア	8,856	7,771
その他の無形固定資産	2,498	4,026
退職給付に係る資産	24,596	10,337
繰延税金資産	2,296	3,342
支払承諾見返	697,734	732,003
貸倒引当金	98,435	103,440
資産の部合計	16,779,450	17,409,736
<b>負債の部</b>		
預金	8 10,170,895	8 10,430,050
譲渡性預金	197,481	179,386
コールマネー及び売渡手形	1,321,797	1,870,492
売現先勘定	8 105,625	8 1,241,589
債券貸借取引受入担保金	8 2,140,301	8 618,007
特定取引負債	0	0
借入金	8, 13 1,281,482	8 1,486,134
外国為替	1,059	1,093
社債	14 10,000	14 10,000
その他負債	112,175	112,817
退職給付に係る負債	951	993
利息返還損失引当金	48	23
睡眠預金払戻損失引当金	4,023	3,494
その他の偶発損失引当金	7	3
特別法上の引当金	22	22
繰延税金負債	11,882	139
再評価に係る繰延税金負債	10 23,020	10 22,989
支払承諾	697,734	732,003
負債の部合計	16,078,508	16,709,242

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
<b>純資産の部</b>		
資本金	82,329	82,329
資本剰余金	60,587	60,587
利益剰余金	401,108	434,486
株主資本合計	544,025	577,403
その他有価証券評価差額金	109,600	90,785
繰延ヘッジ損益	12,527	19,451
土地再評価差額金	<sup>10</sup> 51,631	<sup>10</sup> 51,560
退職給付に係る調整累計額	8,211	194
その他の包括利益累計額合計	156,915	123,089
純資産の部合計	700,941	700,493
負債及び純資産の部合計	16,779,450	17,409,736

## 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

## 【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
経常収益	183,677	195,682
資金運用収益	128,976	136,792
貸出金利息	99,877	103,179
有価証券利息配当金	25,645	27,567
コールローン利息及び買入手形利息	20	284
買現先利息	0	0
債券貸借取引受入利息	0	0
預け金利息	3	2
その他の受入利息	3,429	6,328
信託報酬	0	0
役務取引等収益	40,057	38,846
特定取引収益	85	172
その他業務収益	9,464	10,825
その他経常収益	5,093	9,043
償却債権取立益	1,066	369
その他の経常収益	<sup>1</sup> 4,026	<sup>1</sup> 8,673
経常費用	121,375	121,944
資金調達費用	18,072	22,093
預金利息	3,952	4,056
譲渡性預金利息	79	43
コールマネー利息及び売渡手形利息	59	468
売現先利息	1,904	1,731
債券貸借取引支払利息	3,055	4,854
借入金利息	890	1,646
社債利息	195	195
その他の支払利息	7,935	10,034
役務取引等費用	14,305	14,846
その他業務費用	1,629	15
営業経費	<sup>2</sup> 80,087	<sup>2</sup> 76,517
その他経常費用	7,280	8,470
貸倒引当金繰入額	4,567	5,600
その他の経常費用	<sup>3</sup> 2,712	<sup>3</sup> 2,870
経常利益	62,302	73,738

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月31日)
特別利益	0	
固定資産処分益	0	
特別損失	535	273
固定資産処分損	532	273
金融商品取引責任準備金繰入額	3	
税金等調整前当期純利益	61,767	73,464
法人税、住民税及び事業税	17,405	18,489
法人税等調整額	316	1,318
法人税等合計	17,722	19,808
当期純利益	44,044	53,655
親会社株主に帰属する当期純利益	44,044	53,655

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月31日)
当期純利益	44,044	53,655
その他の包括利益	1 28,558	1 33,755
その他有価証券評価差額金	15,385	18,815
繰延ヘッジ損益	132	6,924
退職給付に係る調整額	13,040	8,016
包括利益	72,603	19,900
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	72,603	19,900

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本			
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	株主資本合計
当期首残高	82,329	60,587	374,878	517,795
当期変動額				
剰余金の配当			17,832	17,832
親会社株主に帰属する 当期純利益			44,044	44,044
土地再評価差額金の 取崩			17	17
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)				
当期変動額合計			26,229	26,229
当期末残高	82,329	60,587	401,108	544,025

	その他の包括利益累計額					純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	退職給付に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計	
当期首残高	94,215	12,660	51,649	4,829	128,374	646,170
当期変動額						
剰余金の配当						17,832
親会社株主に帰属する 当期純利益						44,044
土地再評価差額金の 取崩						17
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)	15,385	132	17	13,040	28,540	28,540
当期変動額合計	15,385	132	17	13,040	28,540	54,770
当期末残高	109,600	12,527	51,631	8,211	156,915	700,941

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本			
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	株主資本合計
当期首残高	82,329	60,587	401,108	544,025
当期変動額				
剰余金の配当			20,348	20,348
親会社株主に帰属する 当期純利益			53,655	53,655
土地再評価差額金の 取崩			70	70
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)				
当期変動額合計			33,377	33,377
当期末残高	82,329	60,587	434,486	577,403

	その他の包括利益累計額					純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	退職給付に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計	
当期首残高	109,600	12,527	51,631	8,211	156,915	700,941
当期変動額						
剰余金の配当						20,348
親会社株主に帰属する 当期純利益						53,655
土地再評価差額金の 取崩						70
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)	18,815	6,924	70	8,016	33,826	33,826
当期変動額合計	18,815	6,924	70	8,016	33,826	448
当期末残高	90,785	19,451	51,560	194	123,089	700,493

## 【連結キャッシュ・フロー計算書】

	(単位：百万円)	
	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前当期純利益	61,767	73,464
減価償却費	6,969	7,267
貸倒引当金の増減( )	2,265	5,004
退職給付に係る資産の増減額( は増加)	16,884	14,258
退職給付に係る負債の増減額( は減少)	51	41
利息返還損失引当金の増減額( は減少)	25	25
睡眠預金払戻損失引当金の増減( )	679	529
その他の偶発損失引当金の増減額( は減少)	0	3
資金運用収益	128,976	136,792
資金調達費用	18,072	22,093
有価証券関係損益( )	896	7,786
金銭の信託の運用損益( は運用益)	50	12
為替差損益( は益)	31	26
固定資産処分損益( は益)	532	273
特定取引資産の純増( )減	205	306
特定取引負債の純増減( )	0	0
貸出金の純増( )減	577,841	377,660
預金の純増減( )	545,840	259,155
譲渡性預金の純増減( )	71,142	18,094
借入金(劣後特約付借入金を除く)の純増減( )	2,542	224,651
預け金(日銀預け金を除く)の純増( )減	101	1,952
コールローン等の純増( )減	423,486	431,849
コールマネー等の純増減( )	1,028,777	1,684,659
債券貸借取引受入担保金の純増減( )	527,774	1,522,294
外国為替(資産)の純増( )減	2,963	173
外国為替(負債)の純増減( )	487	33
資金運用による収入	131,949	143,693
資金調達による支出	17,669	21,989
その他	5,464	24,641
小計	1,082,886	108,902
法人税等の支払額	14,193	18,116
営業活動によるキャッシュ・フロー	1,068,692	127,018

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
有価証券の取得による支出	301,480	247,068
有価証券の売却による収入	105,229	109,393
有価証券の償還による収入	272,478	358,784
金銭の信託の減少による収入	7,034	
有形固定資産の取得による支出	4,152	2,965
有形固定資産の売却による収入	5	85
無形固定資産の取得による支出	3,660	4,028
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>	<b>75,455</b>	<b>214,201</b>
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
劣後特約付借入金の返済による支出		20,000
配当金の支払額	17,832	20,348
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>	<b>17,832</b>	<b>40,348</b>
現金及び現金同等物に係る換算差額	31	26
<b>現金及び現金同等物の増減額（は減少）</b>	<b>1,126,282</b>	<b>46,859</b>
現金及び現金同等物の期首残高	2,334,674	3,460,957
現金及び現金同等物の期末残高	<sup>1</sup> 3,460,957	<sup>1</sup> 3,507,817

## 【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

### 1 連結の範囲に関する事項

#### (1) 連結子会社 13社

連結子会社名は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため省略しております。

(連結の範囲の変更)

株式会社R & D ビジネスファクトリーは新規設立により、当連結会計年度から連結の範囲に含めております。

#### (2) 非連結子会社 3社

会社名

F F G 農業法人成長支援投資事業有限責任組合

F F G 農林漁業成長産業化支援投資事業有限責任組合

F F G ベンチャー投資事業有限責任組合第1号

非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及びその他の包括利益累計額(持分に見合う額)等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。

### 2 持分法の適用に関する事項

#### (1) 持分法適用の非連結子会社

該当ありません。

#### (2) 持分法適用の関連会社

該当ありません。

#### (3) 持分法非適用の非連結子会社 3社

会社名

F F G 農業法人成長支援投資事業有限責任組合

F F G 農林漁業成長産業化支援投資事業有限責任組合

F F G ベンチャー投資事業有限責任組合第1号

持分法非適用の非連結子会社は、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及びその他の包括利益累計額(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除いております。

#### (4) 持分法非適用の関連会社

該当ありません。

### 3 連結子会社の事業年度等に関する事項

#### (1) 連結子会社の決算日は次のとおりであります。

6月末日 3社

3月末日 10社

#### (2) 6月末日を決算日とする子会社については、3月末日現在で実施した仮決算に基づく財務諸表により、またその他の子会社については、それぞれの決算日の財務諸表により連結しております。

連結決算日と上記の決算日等との間に生じた重要な取引については、必要な調整を行っております。

### 4 会計方針に関する事項

#### (1) 特定取引資産・負債の評価基準及び収益・費用の計上基準

金利、通貨の価格、金融商品市場における相場その他の指標に係る短期的な変動、市場間の格差等を利用して利益を得る等の目的(以下、「特定取引目的」という。)の取引については、取引の約定時点を基準とし、連結貸借対照表上「特定取引資産」及び「特定取引負債」に計上するとともに、当該取引からの損益を連結損益計算書上「特定取引収益」及び「特定取引費用」に計上しております。

特定取引資産及び特定取引負債の評価は、有価証券及び金銭債権等については連結決算日の時価により、スワップ・先物・オプション取引等の派生商品については連結決算日において決済したものとみなした額により行っております。

また、特定取引収益及び特定取引費用の損益計上は、当連結会計年度中の受払利息等に、有価証券及び金銭債権等については前連結会計年度末と当連結会計年度末における評価損益の増減額を、派生商品については前連結会計年度末と当連結会計年度末におけるみなし決済からの損益相当額の増減額を加えております。

(2) 有価証券の評価基準及び評価方法

有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による原価法又は償却原価法(定額法)、その他有価証券については原則として連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引(特定取引目的の取引を除く)の評価は、時価法により行っております。

(4) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

建物については、主として定額法、その他の有形固定資産については、定率法を採用しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 : 3年~50年

その他 : 2年~20年

無形固定資産(リース資産を除く)

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。

リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」中のリース資産は、原則としてリース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。

(5) 貸倒引当金の計上基準

当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下、「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下、「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(以下、「破綻懸念先」という。)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

破綻懸念先及び貸出条件緩和債権等を有する債務者で与信額が一定額以上の大口債務者のうち、債権の元本の回収及び利息の受取りに係るキャッシュ・フローを合理的に見積もることができる債権については、当該キャッシュ・フローを貸出条件緩和実施前の約定利率で割引いた金額と債権の帳簿価額との差額を貸倒引当金とする方法(キャッシュ・フロー見積法)により計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間におけるデフォルト件数から算出したデフォルト率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額してはありますが、2018年連結会計年度から直接減額を行っておりません。当連結会計年度末における2017年連結会計年度末までの当該直接減額した額の残高は6,236百万円(前連結会計年度末は12,020百万円)であります。

連結子会社の貸倒引当金については、貸倒実績率等に基づく処理を行っております。

(6) 利息返還損失引当金の計上基準

利息返還損失引当金は、利息制限法の上限金利を超過する貸付金利息等の返還請求に備えるため必要な額を計上しております。

(7) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り、必要と認められる額を計上しております。

(8) その他の偶発損失引当金の計上基準

その他の偶発損失引当金は、業務上発生する可能性のある偶発損失を見積り、必要と認められる額を計上しております。

(9) 特別法上の引当金の計上基準

特別法上の引当金は、FFG証券株式会社が計上した金融商品取引責任準備金であり、証券事故による損失に備えるため、金融商品取引法第46条の5第1項及び金融商品取引業等に関する内閣府令第175条の規定に定めるところにより算出した額を計上しております。

(10) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付債務の算定に当たり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用：発生時に全額を処理

数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日連結会計年度から損益処理

なお、一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(11) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

当行及び連結子会社の外貨建資産・負債については、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。

(12) 重要なヘッジ会計の方法

金利リスク・ヘッジ

当行の金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日)に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の(残存)期間毎にグルーピングのうえ特定し評価しております。また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。

為替変動リスク・ヘッジ

当行の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 2002年7月29日)に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

なお、一部の資産・負債については、金利スワップの特例処理を行っております。

(13) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。

(14) 消費税等の会計処理

当行及び国内連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(15) 連結納税制度の適用

当行及び一部の国内連結子会社は、株式会社ふくおかフィナンシャルグループを連結納税親会社とする連結納税主体の連結納税子会社として、連結納税制度を適用しております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2018年3月30日)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2018年3月30日)

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。

ステップ1：顧客との契約を識別する。

ステップ2：契約における履行義務を識別する。

ステップ3：取引価格を算定する。

ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する。

ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

当該会計基準等の適用による影響は、評価中であります。

(連結貸借対照表関係)

1 非連結子会社の株式又は出資金の総額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
出資金	1,996百万円	3,415百万円

2 無担保の消費貸借契約(債券貸借取引)により貸し付けている有価証券が、「有価証券」中の国債に含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	33,692百万円	百万円

無担保の消費貸借契約(債券貸借取引)により借り入れている有価証券のうち、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有する有価証券は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
(再)担保に差し入れている有価証券	755,076百万円	621,954百万円
当連結会計年度末に当該処分をせずに所有している有価証券	3,494百万円	2,320百万円

3 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
破綻先債権額	2,831百万円	4,645百万円
延滞債権額	113,611百万円	110,668百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下、「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(1965年政令第97号)第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

4 貸出金のうち3ヵ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
3ヵ月以上延滞債権額	77百万円	737百万円

なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

5 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
貸出条件緩和債権額	37,861百万円	41,131百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3ヵ月以上延滞債権に該当しないものであります。

6 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
合計額	154,382百万円	157,183百万円

なお、上記3から6に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

7 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
36,128百万円	34,678百万円

8 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
担保に供している資産		
現金預け金	2,530百万円	百万円
有価証券	2,676,475	2,400,290
貸出金	1,242,528	1,571,716
その他資産	111	2
計	3,921,645	3,972,009

担保資産に対応する債務

預金	47,497	48,874
売現先勘定	105,625	1,241,589
債券貸借取引受入担保金	2,140,301	618,007
借入金	1,258,054	1,482,814

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
現金預け金	百万円	2,930百万円
有価証券	31,390百万円	百万円
その他資産	12百万円	219百万円

非連結子会社の借入金等にかかる担保提供資産はありません。

また、その他資産には、先物取引差入証拠金、金融商品等差入担保金及び保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
先物取引差入証拠金	156百万円	132百万円
金融商品等差入担保金	100,006百万円	107,744百万円
保証金	1,422百万円	1,423百万円

なお、手形の再割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日)に基づき金融取引として処理しておりますが、これにより引き渡した商業手形及び買入外国為替等はありません。

- 9 当座貸越契約及び貸付金等に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
融資未実行残高	3,212,060百万円	3,204,063百万円
うち原契約期間が1年以内のもの (又は任意の時期に無条件で取消可能なもの)	3,054,157百万円	3,007,913百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内(社内)手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

- 10 土地の再評価に関する法律(1998年3月31日公布法律第34号)に基づき、当行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価を行った年月日

1998年3月31日

同法律第3条第3項に定める再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令(1998年3月31日公布政令第119号)第2条第4号に定める算定方法に基づいて、地価税法に規定する地価税の課税価格の計算の基礎となる土地の価額(路線価)を基準として時価を算出。同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の期末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	19,562百万円	11,926百万円

- 11 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
減価償却累計額	73,204百万円	76,442百万円

- 12 有形固定資産の圧縮記帳額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
圧縮記帳額	5,509百万円	5,454百万円
(当該連結会計年度の圧縮記帳額)	(百万円)	(百万円)

- 13 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金が含まれておりません。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
劣後特約付借入金	20,000百万円	百万円

- 14 社債には、期限前償還条項付無担保社債(劣後特約付)が含まれております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
期限前償還条項付無担保社債 (劣後特約付)	10,000百万円	10,000百万円

- 15 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	10,055百万円	9,928百万円

(連結損益計算書関係)

1 その他の経常収益には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
株式等売却益	829百万円	6,819百万円
最終取引日以降長期間移動のない預金 等に係る収益計上額	2,488百万円	1,093百万円

2 営業経費には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
給料・手当	31,587百万円	31,427百万円
退職給付費用	2,234百万円	1,333百万円

3 その他の経常費用には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
睡眠預金払戻損失引当金繰入額	491百万円	1,077百万円

(連結包括利益計算書関係)

1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	20,501	11,349
組替調整額	1,856	15,079
税効果調整前	22,358	26,429
税効果額	6,972	7,613
その他有価証券評価差額金	15,385	18,815
繰延ヘッジ損益		
当期発生額	4,619	22,233
組替調整額	4,810	12,284
税効果調整前	190	9,948
税効果額	58	3,024
繰延ヘッジ損益	132	6,924
退職給付に係る調整額		
当期発生額	16,099	11,138
組替調整額	2,636	379
税効果調整前	18,736	11,517
税効果額	5,695	3,501
退職給付に係る調整額	13,040	8,016
その他の包括利益合計	28,558	33,755

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位：千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度 末株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	739,952			739,952	
合 計	739,952			739,952	
自己株式					
普通株式					
合 計					

2 配当に関する事項

(1)当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年6月29日 定時株主総会	普通株式	8,509	11.50	2017年 3月31日	2017年 6月29日
2017年11月13日 取締役会	普通株式	9,323	12.60	2017年 9月30日	2017年 12月7日

(2)基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月28日 定時株主総会	普通株式	9,619	利益剰余金	13.00	2018年 3月31日	2018年 6月28日

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位：千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度 末株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	739,952			739,952	
合 計	739,952			739,952	
自己株式					
普通株式					
合 計					

2 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月28日 定時株主総会	普通株式	9,619	13.00	2018年 3月31日	2018年 6月28日
2018年11月12日 取締役会	普通株式	10,729	14.50	2018年 9月30日	2018年 12月7日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年6月27日 定時株主総会	普通株式	11,469	利益剰余金	15.50	2019年 3月31日	2019年 6月27日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
現金預け金勘定	3,475,808百万円	3,524,620百万円
預け金(日本銀行預け金を除く)	14,850	16,802
現金及び現金同等物	<u>3,460,957</u>	<u>3,507,817</u>

(リース取引関係)

1 ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

有形固定資産

主として、事務機器及び備品であります。

(2) リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 会計方針に関する事項」の「(4) 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

2 オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1年内	43	31
1年超	49	39
合計	92	70

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、銀行業務を中心に保証業務、事業再生支援・債権管理回収業務、銀行事務代行業務、証券業務などの金融サービスを提供しております。これらの事業において、資金運用手段はお客様への貸出金を主として、その他コールローン及び債券を中心とした有価証券等であります。また、資金調達手段はお客様からお預かりする預金を主として、その他コールマネー、借入金、社債等であります。このように、主として金利変動を伴う金融資産及び金融負債を有しているため、金利変動による不利な影響が生じないように、当行グループでは、資産及び負債の総合的管理(A L M)をしております。その一環として、デリバティブ取引も行ってあります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行グループが保有する金融商品の内容及びそのリスクは、主として以下のとおりであります。

(貸出金)

主に国内の法人及び個人のお客様に対する貸出金であり、貸出先の財務状況の悪化等により、資産の価値が減少ないし消失し損失を被る信用リスク及び金利が変動することにより利益が減少するないし損失を被る金利リスクに晒されております。

(有価証券)

主に株式及び債券であり、発行体の信用リスク、金利リスク、市場の価値が変動し損失を被る価格変動リスク及び一定の環境の下で売却が困難になるなどの流動性リスク(市場流動性リスク)に晒されております。金利リスクのうち、一部は金利スワップ取引を行うことにより当該リスクを軽減しております。外貨建債券については、上記リスクのほか、為替の変動により損失を被る為替変動リスクに晒されておりますが、通貨スワップ取引等を行うことにより当該リスクを軽減しております。

(預金及び譲渡性預金)

主に法人及び個人のお客様からお預かりする当座預金、普通預金等の要求払預金、自由金利定期等の定期性預金及び譲渡性預金であり、予期せぬ資金の流出により、必要な資金確保が困難になる等の流動性リスク(資金繰りリスク)に晒されております。

(デリバティブ取引)

デリバティブ取引はお客様に対するヘッジ手段等の提供や、当行グループの資産及び負債の総合的管理(A L M)等を目的に行っており、市場リスク(金利リスク、価格変動リスク、為替変動リスク)、信用リスク及び流動性リスク(市場流動性リスク)に晒されております。

また、A L Mの一環として、金利リスク及び為替変動リスクを回避する目的で行っているデリバティブ取引の一部にはヘッジ会計を適用しておりますが、当該ヘッジ会計に関するヘッジ手段、ヘッジ対象、ヘッジ方針及びヘッジの有効性の評価方法等につきましては、「(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)4 会計方針に関する事項」の「(12)重要なヘッジ会計の方法」に記載のとおりであります。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスクの管理

信用リスクは当行グループが保有する主要なリスクであり、資産の健全性を維持しつつ適正な収益をあげるうえで、適切な信用リスク管理を行うことは銀行経営における最も重要な課題の一つとなっております。

当行グループの取締役会は、信用リスク管理の基本方針を定めた「信用リスク管理方針」及び基本方針に基づき与信業務を適切に運営するための基本的な考え方や判断・行動の基準を明記した「与信の基本方針(クレジット・ポリシー)」を制定し、信用リスクを適切に管理しております。また、債務者の実態把握、債務者に対する経営相談・経営指導及び経営改善に向けた取組みへの支援を行っております。加えて、個別債務者やポートフォリオ等の信用リスク量を算定し、一般貸倒引当金の検証、自己資本との比較、信用リスク管理手法への活用等を行い、信用リスクを合理的かつ定量的に把握しております。

信用リスク管理にかかる組織は、信用リスク管理部門及び内部監査部門で明確に分離しております。さらに信用リスク管理部門には、審査部門、与信管理部門、格付運用部門、問題債権管理部門を設置しており、信用リスク管理の実効性を確保しております。与信管理部門は、信用リスクに関するアクションプランを定めた「リスク管理プログラム」に則り、信用リスク管理態勢の整備・確立に努めております。内部監査部門は、信用リスクの管理状況の適切性を監査しております。

また、与信管理部門は、信用リスク及び信用リスク管理の状況について定期的に又は必要に応じて適時・適切に取締役会やALM委員会等へ報告しております。

有価証券の発行体の信用リスク及びデリバティブ取引のカウンターパーティーリスクに関しては、信用リスク管理部門において、信用情報や時価の把握を定期的に行うことで管理を行っております。

#### 市場リスクの管理

当行グループの収益の中で、金利リスク等の市場リスクにかかる収益は、信用リスクのそれとともに大きな収益源の一つですが、そのリスク・テイクの内容次第では、市場リスク・ファクターの変動によって収益力や財務内容の健全性に重大な影響を及ぼすことになります。

当行グループの取締役会は、市場リスク管理の基本方針を定めた「市場リスク管理方針」及び具体的管理方法を定めた管理規則を制定し、市場リスクを適切に管理しております。

当行グループでは、ALM委員会においてマーケット環境の変化に対する機動的かつ具体的な対応策を協議し、対応方針を決定しております。リスク限度枠等については、株式会社ふくおかフィナンシャルグループから配賦されたリスク資本額やその他市場リスク管理に必要な限度枠を常務会等で設定し、半期に一度、見直しを行っております。

市場リスク管理にかかる組織は、市場取引部門(フロント・オフィス)、市場リスク管理部門(ミドル・オフィス)、市場事務管理部門(バック・オフィス)及び内部監査部門で明確に分離しており、相互牽制機能が発揮できる組織体制としております。市場リスク管理部門は、市場リスクに関するアクションプランを定めた「リスク管理プログラム」に則り、市場リスク管理態勢の整備・確立に努めております。内部監査部門は、市場リスクの管理状況の適切性を監査しております。

また、市場リスク管理部門は、市場リスク及び市場リスク管理の状況について定期的に又は必要に応じて適時・適切に取締役会やALM委員会等へ報告しております。

#### <市場リスクに係る定量的情報>

##### (ア)トレーディング目的の金融商品

当行グループでは、「特定取引資産」である売買目的有価証券、「デリバティブ取引」のうち金利関連取引、通貨関連取引及び債券関連取引の一部をトレーディング目的で保有しております。

これらの金融商品はお客様との取引及びその反対取引がほとんどであり、リスクは僅少であります。

##### (イ)トレーディング目的以外の金融商品

###### ( )金利リスク

当行グループにおいて、主要なリスク変数である金利の変動の影響を受ける主たる金融商品は、「貸出金」、「有価証券」のうち債券、「預金」、「借入金」、「社債」、「デリバティブ取引」のうち金利関連取引であります。

当行グループでは、これらの金融資産及び金融負債について、ヒストリカル・シミュレーション法(保有期間60日、信頼区間99%、観測期間1,250日)によってVaRを算定しており、金利の変動リスク管理にあたっての定量的分析に利用しております。

2018年3月31日現在で当行グループの金利リスク量(損失額の推計値)は、22,610百万円であります。

2019年3月31日現在で当行グループの金利リスク量(損失額の推計値)は、24,356百万円であります。

当行グループでは、モデルが算出するVaRと、VaR計測時のポートフォリオに基づく仮定の損益とを比較するバックテストを実施しております。2018年度に関して実施したバックテストの結果、損失がVaRを超過した実績はなく、使用する計測モデルは、十分な精度により金利リスクを捕捉しているものと考えております。

なお、金融負債の「預金」のうち満期のない「流動性預金」については、内部モデルによりその長期滞留性を考慮して適切に推計した期日を用いて、VaRを算定しております。

但し、V a Rは過去の相場変動をベースに、統計的に算出した一定の発生確率での金利リスク量を計測しているため、過去の相場変動で観測できなかった金利変動が発生した場合は、リスクを捕捉できない可能性があります。

( )価格変動リスク

当行グループにおいて、主要なリスク変数である株価の変動の影響を受ける主たる金融商品は、「有価証券」のうち上場株式であります。

当行グループでは、これらの金融資産について、ヒストリカル・シミュレーション法(保有期間120日、信頼区間99%、観測期間2,500日)によってV a Rを算定しており、価格変動リスクの管理にあたっての定量的分析に利用しております。

2018年3月31日現在で当行グループの価格変動リスク量は、25,985百万円であります。

2019年3月31日現在で当行グループの価格変動リスク量は、27,741百万円であります。

当行グループでは、モデルが算出するV a Rと、V a R計測時のポートフォリオに基づく仮定の損益とを比較するバックテストを実施しております。2018年度に関して実施したバックテストの結果、損失がV a Rを複数回超過したため、2019年2月以降のV a R計測においては、V a Rに一定の乗数を乗じることで、保守性を確保しております。

このように、V a Rは過去の相場変動をベースに、統計的に算出した一定の発生確率での価格変動リスク量を計測する手法であり、過去の相場変動で観測できなかった価格変動が発生した場合は、リスクを捕捉できない可能性があるため、当行グループでは、必要に応じて、適時・適切に使用する計測モデル等の見直しを行い、リスクを捕捉する精度を向上させております。

( )為替変動リスク

当行グループにおいて、リスク変数である為替の変動の影響を受ける主たる金融商品は、「貸出金」のうち外貨建貸付金、「有価証券」のうち外貨建債券、「預金」のうち外貨建預金、「デリバティブ取引」のうち通貨関連取引であります。

当行グループでは、当該金融資産と金融負債相殺後の純額をコントロールすることによって為替リスクを回避しており、リスクは僅少であります。

流動性リスクの管理

当行グループでは、流動性リスクの軽視が経営破綻や、ひいては金融機関全体の連鎖的破綻(システミック・リスク)の顕在化につながりかねないため、流動性リスクの管理には万全を期す必要があると考えております。

当行グループの取締役会は、流動性リスク管理の基本方針を定めた「流動性リスク管理方針」、具体的管理方法を定めた管理規則及び流動性危機時の対応方針を定めた規則を制定し、流動性リスクを適切に管理しております。

当行グループでは、A L M委員会においてマーケット環境の変化に対する機動的かつ具体的な対応策を協議し、対応方針を決定しております。リスク限度枠等については、資金繰りリミットや担保差入限度額等を常務会等で設定し、半期に一度、見直しを行っております。

当行グループの資金繰りの状況について、状況に応じた管理区分(平常時・懸念時・危機時等)及び状況に応じた対応方針を定め、資金繰り管理部門が月次で管理区分を判断し、A L M委員会で必要に応じて対応方針を協議する体制としております。

流動性リスク管理にかかる組織は、日々の資金繰りの管理・運営を行う資金繰り管理部門、日々の資金繰りの管理・運営等の適切性のモニタリング等を行う流動性リスク管理部門及び内部監査部門で明確に分離しており、相互牽制機能が発揮できる組織体制としております。流動性リスク管理部門は、流動性リスクに関するアクションプランを定めた「リスク管理プログラム」に則り、流動性リスク管理態勢の整備・確立に努めております。内部監査部門は、流動性リスクの管理状況の適切性を監査しております。

また、流動性リスク管理部門は、流動性リスク及び流動性リスク管理の状況について定期的に又は必要に応じて適時・適切に取締役会やA L M委員会等へ報告しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません(注2)参照)。また、「連結貸借対照表計上額」の重要性が乏しい科目については、記載を省略しております。

前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	3,475,808	3,475,808	0
(2) コールローン及び買入手形	409,661	409,661	0
(3) 買入金銭債権(*1)	63,661	63,707	45
(4) 有価証券			
満期保有目的の債券	83,577	90,129	6,552
その他有価証券	2,281,616	2,281,616	
(5) 貸出金	9,493,627		
貸倒引当金(*1)	97,748		
	9,395,879	9,499,045	103,166
資産計	15,710,204	15,819,969	109,764
(1) 預金	10,170,895	10,171,369	474
(2) 譲渡性預金	197,481	197,484	3
(3) コールマネー及び売渡手形	1,321,797	1,321,789	8
(4) 売現先勘定	105,625	105,655	30
(5) 債券貸借取引受入担保金	2,140,301	2,139,960	341
(6) 借入金	1,281,482	1,274,246	7,235
(7) 社債	10,000	10,536	536
負債計	15,227,583	15,221,042	6,540
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	1,878	1,878	
ヘッジ会計が適用されているもの	(24,360)	(24,360)	
デリバティブ取引計	(22,482)	(22,482)	

(\*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。なお、買入金銭債権に対する貸倒引当金については、重要性が乏しいため、連結貸借対照表計上額から直接減額しております。

(\*2) 特定取引資産・負債及びその他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、( )で表示しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	3,524,620	3,524,620	0
(2) コールローン及び買入手形	838,769	838,770	0
(3) 買入金銭債権(*1)	66,261	66,314	53
(4) 有価証券			
満期保有目的の債券	69,271	74,477	5,205
その他有価証券	2,042,039	2,042,039	
(5) 貸出金	9,871,287		
貸倒引当金(*1)	100,316		
	9,770,970	9,895,207	124,237
資産計	16,311,933	16,441,430	129,497
(1) 預金	10,430,050	10,430,365	315
(2) 譲渡性預金	179,386	179,389	2
(3) コールマネー及び売渡手形	1,870,492	1,870,479	12
(4) 売現先勘定	1,241,589	1,241,543	46
(5) 債券貸借取引受入担保金	618,007	617,860	146
(6) 借入金	1,486,134	1,476,237	9,896
(7) 社債	10,000	10,388	388
負債計	15,835,661	15,826,264	9,396
デリバティブ取引(*2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	2,353	2,353	
ヘッジ会計が適用されているもの	(33,518)	(33,518)	
デリバティブ取引計	(31,164)	(31,164)	

(\*1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。なお、買入金銭債権に対する貸倒引当金については、重要性が乏しいため、連結貸借対照表計上額から直接減額しております。

(\*2) 特定取引資産・負債及びその他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、( )で表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

#### 資産

##### (1) 現金預け金

満期のない預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預け金については、個々の取引から発生する将来キャッシュ・フローを見積もり、期間別の無リスクの市場利率に、内部格付に準じた債務者区分ごとの予想損失率に基づく信用リスク要因等を上乗せした利率で割り引いた現在価値を算定しております。

##### (2) コールローン及び買入手形

これらのうち、有担保取引については、ほとんどの部分が担保により信用リスクが相殺されているため、個々の取引から発生する将来キャッシュ・フローを見積もり、期間別の無リスクの市場利率で割り引いた現在価値を算定しております。また無担保取引については、個々の取引から発生する将来キャッシュ・フローを見積もり、期間別の無リスクの市場利率に、内部格付に準じた債務者区分ごとの予想損失率に基づく信用リスク要因等を上乗せした利率で割り引いた現在価値を算定しております。

(3) 買入金銭債権

買入金銭債権のうち、満期のあるものについては、取引金融機関から提示された価格によっております。但し、取引金融機関から提示された価格が取得できないものについては、個々の取引から発生する将来キャッシュ・フローを見積もり、期間別の無リスクの市場利子率に、内部格付に準じた債務者区分ごとの予想損失率に基づく信用リスク要因等を上乘せした利率で割り引いた現在価値を算定しております。また満期のないものについては、信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(4) 有価証券

株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。投資信託は、公表された基準価格によっております。但し、債券のうち、取引所の価格及び取引金融機関から提示された価格のいずれも取得できないものについては、個々の取引から発生する将来キャッシュ・フローを見積もり、期間別の無リスクの市場利子率に、内部格付に準じた債務者区分ごとの予想損失率に基づく信用リスク要因等を上乘せした利率で割り引いた現在価値を算定しております。

自行保証付私募債は、個々の取引から発生する将来キャッシュ・フローを見積もり、期間別の無リスクの市場利子率に、内部格付に準じた債務者区分ごとの予想損失率に基づく信用リスク要因等を上乘せした利率で割り引いた現在価値を算定しております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については「(有価証券関係)」に記載しております。

(5) 貸出金

貸出金については、個々の取引から発生する将来キャッシュ・フローを見積もり、期間別の無リスクの市場利子率に、内部格付に準じた貸出金の種類及び債務者区分ごとの予想損失率に基づく信用リスク要因等を上乘せした利率で割り引いた現在価値を算定しております。将来キャッシュ・フローの見積もりは、変動金利によるものは短期間で市場金利を反映するため、次の金利期日を満期日とみなしております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、見積将来キャッシュ・フローの現在価値又は担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額に近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

**負債**

(1) 預金、及び(2) 譲渡性預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額(帳簿価額)を時価とみなしております。また、定期預金の時価は、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを見積もり、新規に預金を受け入れる際に使用する利率で割り引いた現在価値を算定しております。

(3) コールマネー及び売渡手形、(4) 売現先勘定、及び(5) 債券貸借取引受入担保金

これらは、個々の取引から発生する将来キャッシュ・フローを見積もり、期間別の無リスクの市場利子率に、市場価格のある社債等から推定される当行の信用リスク要因等を上乘せした利率で割り引いた現在価値を算定しております。

(6) 借入金

借入金については、個々の取引から発生する将来キャッシュ・フローを見積もり、期間別の無リスクの市場利子率に、市場価格のある社債等から推定される当行の信用リスク要因等を上乘せした利率で割り引いた現在価値を算定しております。将来キャッシュ・フローの見積もりは、変動金利によるものは短期間で市場金利を反映するため、次の金利期日を満期日とみなしております。

(7) 社債

当行の発行する社債の時価は、市場価格があるものは市場価格によっております。市場価格のないものは、個々の取引から発生する将来キャッシュ・フローを見積もり、期間別の無リスクの市場利子率に、市場価格のある社債等から推定される当行の信用リスク要因等を上乘せした利率で割り引いた現在価値を算定しております。将来キャッシュ・フローの見積もりは、変動金利によるものは短期間で市場金利を反映するため、次の金利期日を満期日とみなしております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引については、「(デリバティブ取引関係)」に記載しております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(4)その他有価証券」には含まれておりません。

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
非上場株式(*1)(*2)	6,468	6,342
非上場外国証券(*1)	0	0
投資事業有限責任組合等(*2)(*3)	15,831	22,031
合計	22,300	28,374

(\*1) 非上場株式及び非上場外国証券については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしておりません。

(\*2) 前連結会計年度において、非上場株式等について38百万円減損処理を行っております。

当連結会計年度において、非上場株式について6百万円減損処理を行っております。

(\*3) 投資事業有限責任組合等のうち、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしておりません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額  
前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	3,385,916					
コールローン及び買入手形	409,661					
買入金銭債権	63,303					480
有価証券	347,646	664,688	331,802	151,711	121,665	562,203
満期保有目的の債券	14,305	39,625	12,587	17,058		
うち国債	9,290	31,680	3,100	14,374		
社債	5,015	7,945	9,487	2,683		
其他有価証券のうち 満期があるもの	333,340	625,062	319,214	134,653	121,665	562,203
うち国債	274,197	250,776	143,694	52,773	52,690	463,862
地方債	6,409	18,908	25,933		787	9,658
社債	35,101	270,195	86,507	14,929	514	54,043
その他	17,631	85,181	63,079	66,950	67,673	34,638
貸出金(*)	2,652,669	1,542,163	1,271,145	832,884	958,041	2,030,108
合計	6,859,197	2,206,851	1,602,948	984,596	1,079,706	2,592,792

(\*) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない116,442百万円、期間の定めのないもの90,171百万円は含めておりません。

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	3,431,650					
コールローン及び買入手形	838,769					
買入金銭債権	66,123					404
有価証券	373,771	463,681	259,293	118,450	105,251	596,297
満期保有目的の債券	39,625		29,645			
うち国債	31,680		17,474			
社債	7,945		12,171			
其他有価証券のうち 満期があるもの	334,146	463,681	229,647	118,450	105,251	596,297
うち国債	154,752	213,252	57,327	56,694	30,201	447,330
地方債	9,074	25,925	9,629	790		9,338
社債	132,890	146,888	65,284	1,955		75,413
その他	37,428	77,615	97,406	59,009	75,049	64,215
貸出金(*)	2,800,416	1,554,364	1,402,948	865,166	967,933	2,077,449
合計	7,510,731	2,018,045	1,662,242	983,617	1,073,184	2,674,150

(\*) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない115,314百万円、期間の定めのないもの87,694百万円は含めておりません。

(注4) 社債、借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額  
前連結会計年度(2018年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*)	9,923,048	200,938	41,307	1,897	3,703	
譲渡性預金	197,461	20				
コールマネー及び売渡手形	1,321,797					
売現先勘定	52,505	21,248	31,872			
債券貸借取引受入担保金	2,140,301					
借入金	42,746	691,170	527,020	20,000	545	
社債					10,000	
合計	13,677,860	913,376	600,199	21,897	14,249	

(\*) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*)	10,178,793	195,615	49,111	2,704	3,825	
譲渡性預金	179,366	20				
コールマネー及び売渡手形	1,870,492					
売現先勘定	1,208,292	33,297				
債券貸借取引受入担保金	618,007					
借入金	249,597	791,014	445,020		502	
社債					10,000	
合計	14,304,550	1,019,946	494,131	2,704	14,327	

(\*) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

(有価証券関係)

- 1 連結貸借対照表の「有価証券」のほか、「特定取引資産」中の商品有価証券及び「買入金銭債権」中の信託受益権を含めて記載しております。
- 2 「子会社株式及び関連会社株式」については、財務諸表における注記事項として記載しております。

1 売買目的有価証券

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
連結会計年度の損益に含まれた評価差額(百万円)	3	0

2 満期保有目的の債券

前連結会計年度(2018年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの	国債	58,444	64,060	5,616
	社債	23,096	24,055	959
	その他			
	小計	81,540	88,116	6,575
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの	国債			
	社債	2,036	2,013	23
	その他	463	461	2
	小計	2,500	2,474	25
合計		84,040	90,591	6,550

当連結会計年度(2019年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの	国債	49,154	53,773	4,619
	社債	20,117	20,703	586
	その他			
	小計	69,271	74,477	5,205
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの	国債			
	社債			
	その他	388	386	2
	小計	388	386	2
合計		69,660	74,863	5,203

3 その他有価証券

前連結会計年度(2018年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	153,433	49,698	103,735
	債券	1,673,464	1,623,024	50,440
	国債	1,237,995	1,192,595	45,399
	地方債	32,463	31,879	583
	社債	403,005	398,548	4,457
	その他	207,946	202,663	5,283
	小計	2,034,844	1,875,385	159,458
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株式	3,580	4,369	788
	債券	87,521	87,591	70
	国債			
	地方債	29,234	29,259	24
	社債	58,286	58,332	45
	その他	155,670	158,155	2,485
	小計	246,772	250,116	3,344
合計		2,281,616	2,125,502	156,114

当連結会計年度(2019年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	株式	123,479	52,984	70,494
	債券	1,389,291	1,338,937	50,353
	国債	920,787	874,505	46,281
	地方債	50,008	49,497	511
	社債	418,495	414,934	3,560
	その他	371,213	359,420	11,793
	小計	1,883,984	1,751,343	132,641
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	株式	2,719	3,814	1,094
	債券	47,459	47,615	156
	国債	38,771	38,927	155
	地方債	4,750	4,750	0
	社債	3,937	3,938	1
	その他	107,876	109,581	1,704
	小計	158,054	161,011	2,956
合計		2,042,039	1,912,354	129,685

4 当連結会計年度中に売却した満期保有目的の債券

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)及び当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)ともに該当事項はありません。

5 当連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	1,161	829	0
債券	37,251	3	5
国債			
地方債	6,428	0	1
社債	30,823	3	3
その他	28,696		965
合計	67,109	833	970

(注) その他有価証券で時価を把握することが極めて困難と認められるものを含んでおります。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	9,767	6,819	0
債券	106,080	912	5
国債	65,453	905	
地方債	9,949	3	3
社債	30,676	3	1
その他	5,224	133	6
合計	121,072	7,866	11

(注) その他有価証券で時価を把握することが極めて困難と認められるものを含んでおります。

6 保有目的を変更した有価証券

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)及び当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)ともに該当事項はありません。

7 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券(時価を把握することが極めて困難なものを除く)のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当該連結会計年度の損失として処理(以下、「減損処理」という。)しております。

前連結会計年度における減損処理額は、該当ありません。

当連結会計年度における減損処理額は、62百万円(うち、株式62百万円)であります。

また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、資産の自己査定基準において、有価証券の発行会社の区分毎に以下のとおり定めております。

破綻先、実質破綻先、破綻懸念先	時価が取得原価に比べて下落
要注意先	時価が取得原価に比べて30%以上下落
正常先	時価が取得原価に比べて50%以上下落又は、時価が取得原価に比べて30%以上50%未満下落したもので市場価格が一定水準以下で推移等

なお、破綻先とは、破産、特別清算、手形取引所における取引停止処分等、法的・形式的に経営破綻の事実が発生している発行会社、実質破綻先とは、実質的に経営破綻に陥っている発行会社、破綻懸念先とは、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる発行会社であります。要注意先とは、今後の管理に注意を要する発行会社であります。正常先とは、上記破綻先、実質破綻先、破綻懸念先及び要注意先以外の発行会社であります。

(金銭の信託関係)

1 運用目的の金銭の信託

前連結会計年度(2018年3月31日)

	連結貸借対照表計上額(百万円)	連結会計年度の損益に含まれた評価差額 (百万円)
運用目的の金銭の信託	1,013	13

当連結会計年度(2019年3月31日)

	連結貸借対照表計上額(百万円)	連結会計年度の損益に含まれた評価差額 (百万円)
運用目的の金銭の信託	990	23

2 満期保有目的の金銭の信託

前連結会計年度(2018年3月31日)及び当連結会計年度(2019年3月31日)ともに該当事項はありません。

3 その他の金銭の信託(運用目的及び満期保有目的以外)

前連結会計年度(2018年3月31日)

	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)	うち連結貸借対照 表計上額が取得原 価を超えるもの (百万円)	うち連結貸借対照 表計上額が取得原 価を超えないもの (百万円)
その他の金銭の 信託	3,100	3,100			

(注) 「うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの」「うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの」はそれぞれ「差額」の内訳であります。

当連結会計年度(2019年3月31日)

	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)	うち連結貸借対照 表計上額が取得原 価を超えるもの (百万円)	うち連結貸借対照 表計上額が取得原 価を超えないもの (百万円)
その他の金銭の 信託	3,200	3,200			

(注) 「うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの」「うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの」はそれぞれ「差額」の内訳であります。

(その他有価証券評価差額金)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

前連結会計年度(2018年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	156,114
その他有価証券	156,114
その他の金銭の信託	
( )繰延税金負債	46,513
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	109,600
( )非支配株主持分相当額	
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る 評価差額金のうち親会社持分相当額	
その他有価証券評価差額金	109,600

当連結会計年度(2019年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	129,685
その他有価証券	129,685
その他の金銭の信託	
( )繰延税金負債	38,899
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	90,785
( )非支配株主持分相当額	
(+)持分法適用会社が所有するその他有価証券に係る 評価差額金のうち親会社持分相当額	
その他有価証券評価差額金	90,785

(デリバティブ取引関係)

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	金利先物				
	売建				
	買建				
	金利オプション				
	売建				
	買建				
店頭	金利先渡契約				
	売建				
	買建				
	金利スワップ	343,729	324,791	1,086	1,071
	受取固定・支払変動	171,614	162,395	6,300	6,157
	受取変動・支払固定	172,114	162,395	5,214	5,086
	受取変動・支払変動				
	金利オプション				
	売建				
	買建				
	キャップ	5,698	5,698		2
	売建	2,849	2,849	67	24
	買建	2,849	2,849	67	27
	その他				
売建					
買建					
	合計			1,086	1,074

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

取引所取引については、東京金融取引所等における最終の価格によっております。店頭取引については、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算定しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	金利先物				
	売建				
	買建				
	金利オプション				
	売建				
	買建				
店頭	金利先渡契約				
	売建				
	買建				
	金利スワップ	330,807	321,410	914	971
	受取固定・支払変動	164,403	159,705	7,763	7,646
	受取変動・支払固定	164,403	159,705	6,785	6,678
	受取変動・支払変動				
	受取固定・支払固定	2,000	2,000	64	3
	金利オプション				
	売建				
	買建				
	キャップ	5,427			0
	売建	2,713		20	7
	買建	2,713		20	8
	その他				
売建					
買建					
	合計			914	972

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

取引所取引については、東京金融取引所等における最終の価格によっております。店頭取引については、割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算定しております。

(2) 通貨関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物				
	売建				
	買建				
	通貨オプション				
	売建				
	買建				
店頭	通貨スワップ	762,162	602,146	83	81
	為替予約	103,776	30,684	249	249
	売建	56,327	15,355	2,418	2,418
	買建	47,449	15,328	2,668	2,668
	通貨オプション	2,644		0	1
	売建	1,322		13	3
	買建	1,322		13	4
	その他				
	売建				
	買建				
	合計			166	166

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物				
	売建				
	買建				
	通貨オプション				
	売建				
	買建				
店頭	通貨スワップ	656,483	406,809	80	78
	為替予約	84,642	26,868	254	254
	売建	45,941	13,601	311	311
	買建	38,700	13,266	57	57
	通貨オプション	894			0
	売建	447		3	1
	買建	447		3	1
	その他				
	売建				
	買建				
	合計			334	332

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)及び当連結会計年度(2019年3月31日)ともに該当事項はありません。

(4) 債券関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	債券先物	10,837		40	40
	売建	10,837		40	40
	買建				
	債券先物オプション				
	売建				
	買建				
店頭	債券先渡契約	6,374		19	19
	売建				
	買建	6,374		19	19
	債券店頭オプション				
	売建				
	買建				
	その他				
	売建				
買建					
合計				20	20

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

取引所取引については、大阪取引所等における最終の価格によっております。店頭取引については、オプション価格計算モデル等により算定しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	債券先物	100		0	0
	売建	100		0	0
	買建				
	債券先物オプション				
	売建				
	買建				
店頭	債券先渡契約				
	売建				
	買建				
	債券店頭オプション				
	売建				
	買建				
	その他				
	売建				
買建					
	合計			0	0

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

取引所取引については、大阪取引所等における最終の価格によっております。店頭取引については、オプション価格計算モデル等により算定しております。

(5) 商品関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)及び当連結会計年度(2019年3月31日)ともに該当事項はありません。

(6) クレジット・デリバティブ取引

前連結会計年度(2018年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
店頭	クレジット・デフォルト・オプション 売建				
	買建				
	クレジット・デフォルト・スワップ 売建	40,500	35,500	979	965
	買建	40,500	35,500	979	965
	その他 売建				
	買建				
	合計			979	965

- (注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。  
2 時価の算定  
割引現在価値により算定しております。  
3 「売建」は信用リスクの引受取引、「買建」は信用リスクの引渡取引であります。

当連結会計年度(2019年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
店頭	クレジット・デフォルト・オプション 売建				
	買建				
	クレジット・デフォルト・スワップ 売建	55,500	51,500	1,105	1,084
	買建	53,500	49,500	1,127	1,105
	その他 売建	2,000	2,000	21	21
	買建				
	合計			1,105	1,084

- (注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。  
2 時価の算定  
割引現在価値により算定しております。  
3 「売建」は信用リスクの引受取引、「買建」は信用リスクの引渡取引であります。

## 2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

### (1) 金利関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	金利スワップ		599,889	580,215	17,860
	受取固定・支払変動				
	受取変動・支払固定	貸出金、その他有価証券、預金、譲渡性預金等の有利息の金融資産・負債	597,589	577,914	17,860
	証券化		2,300	2,300	
	金利先物 金利オプション その他				
金利スワップ の特例処理	金利スワップ		93,989	74,264	5,841
	受取固定・支払変動	貸出金、満期保有目的の債券、預金、譲渡性預金等の有利息の金融資産・負債	48,989	39,264	1,812
	受取変動・支払固定		45,000	35,000	4,029
	合計				23,701

(注) 1 主として「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

### 2 時価の算定

割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算定しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	金利スワップ	貸出金、その他有価 証券、預金、譲渡性 預金等の有利息の金 融資産・負債	589,227	577,018	27,265
	受取固定・支払変動		10,000	10,000	38
	受取変動・支払固定		577,267	565,058	27,304
	証券化		1,960	1,960	
	金利先物				
	金利オプション その他				
金利スワップ の特例処理	金利スワップ	貸出金、満期保有目 的の債券、預金、譲 渡性預金等の有利息 の金融資産・負債	73,406	29,915	4,731
	受取固定・支払変動				
	受取変動・支払固定		38,406	29,915	1,397
	受取変動・支払変動		35,000		3,333
合計					31,997

(注) 1 主として「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2 時価の算定

割引現在価値やオプション価格計算モデル等により算定しております。

(2) 通貨関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	通貨スワップ 為替予約 その他	外貨建の貸出金、有 価証券、預金、外国 為替等の金融資産・ 負債	340,874	88,406	658
為替予約等 の振当処理等	通貨スワップ 為替予約	外貨建の貸出金			
	合計				658

(注) 1 主として「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 2002年7月29日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理 方法	通貨スワップ 為替予約 その他	外貨建の貸出金、有 価証券、預金、外国 為替等の金融資産・ 負債	397,328	201,446	1,521
為替予約等 の振当処理等	通貨スワップ 為替予約	外貨建の貸出金			
	合計				1,521

(注) 1 主として「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 2002年7月29日)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)及び当連結会計年度(2019年3月31日)ともに該当事項はありません。

(4) 債券関連取引

前連結会計年度(2018年3月31日)及び当連結会計年度(2019年3月31日)ともに該当事項はありません。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当行は、確定給付制度としてキャッシュバランスプラン型企业年金制度を設け、また、確定拠出制度として企業型の確定拠出年金制度を設けております。

なお、当行は退職給付信託を設定しております。

また、一部の連結子会社が有する退職一時金制度は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2 確定給付制度

(1)退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付債務の期首残高	96,366	96,759
勤務費用	2,824	2,861
利息費用	164	167
数理計算上の差異の発生額	1,141	1,001
退職給付の支払額	3,996	3,917
過去勤務費用の発生額		
制度加入者からの拠出額	258	259
その他	0	0
退職給付債務の期末残高	96,759	97,133

(注) 臨時に支払う割増退職金は含めておりません。

(2)年金資産の期首残高と期末残高の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
年金資産の期首残高	103,178	120,404
期待運用収益	3,599	4,201
数理計算上の差異の発生額	17,241	10,136
事業主からの拠出額	78	3,325
退職給付の支払額	3,950	3,851
退職給付信託の一部返還		7,724
制度加入者からの拠出額	258	259
その他		
年金資産の期末残高	120,404	106,478

(3)退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	95,657	95,962
年金資産	120,404	106,478
	24,746	10,515
非積立型制度の退職給付債務	1,102	1,171
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	23,644	9,344
退職給付に係る負債	951	993
退職給付に係る資産	24,596	10,337
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	23,644	9,344

(4)退職給付費用及びその内訳項目の金額

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
勤務費用	2,824	2,861
利息費用	164	167
期待運用収益	3,599	4,201
数理計算上の差異の損益処理額	2,636	379
過去勤務費用の損益処理額		
その他		
確定給付制度に係る退職給付費用	2,026	1,550

- (注) 1 確定給付企業年金等に対する制度加入者からの拠出額を控除しております。  
2 簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は、一括して「勤務費用」に含めて計上しております。  
3 上記の退職給付費用以外に割増退職金として、前連結会計年度に256百万円、当連結会計年度に187百万円を支払っております。

(5)退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
過去勤務費用		
数理計算上の差異	18,736	11,517
その他		
合計	18,736	11,517

(6)退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(百万円)

区分	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
未認識過去勤務費用		
未認識数理計算上の差異	11,797	280
その他		
合計	11,797	280

(7)年金資産に関する事項

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

区分	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
債券	37%	44%
株式	46%	35%
現金及び預け金等	1%	2%
その他	16%	19%
合計	100%	100%

(注) 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度38%、当連結会計年度28%含まれております。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8)数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎(加重平均で表わしております。)

区分	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
割引率	0.3%	0.3%
長期期待運用収益率	3.5%	3.5%
予想昇給率	3.7%	3.6%

3 確定拠出制度

当行及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は前連結会計年度208百万円、当連結会計年度217百万円であります。

(ストック・オプション等関係)

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
<b>繰延税金資産</b>		
貸倒引当金	30,715百万円	30,723百万円
税務上の繰越欠損金	136	59
退職給付に係る負債	450	3,470
有価証券償却	5,869	5,528
減価償却	1,960	1,914
繰延ヘッジ損益	5,471	8,496
その他	4,713	4,149
<b>繰延税金資産小計</b>	<b>49,317</b>	<b>54,341</b>
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額		40
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額		6,339
<b>評価性引当額小計</b>	<b>7,120</b>	<b>6,379</b>
<b>繰延税金資産合計</b>	<b>42,197</b>	<b>47,962</b>
<b>繰延税金負債</b>		
その他有価証券評価差額金	46,513	38,899
退職給付信託設定益	2,653	2,394
退職給付信託返還有価証券	2,131	2,978
固定資産圧縮積立金	402	402
その他	82	82
<b>繰延税金負債合計</b>	<b>51,783</b>	<b>44,758</b>
<b>繰延税金資産（負債）の純額</b>	<b>9,586百万円</b>	<b>3,203百万円</b>

2 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.6%	30.4%
(調整)		
評価性引当額の増減	0.3	0.9
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.4	0.3
住民税均等割等	0.2	0.2
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	3.0	2.8
税率変更に伴う影響	0.5	
その他	0.3	0.3
<b>税効果会計適用後の法人税等の負担率</b>	<b>28.7%</b>	<b>26.9%</b>

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日。以下、「税効果会計基準一部改正」という。)を当連結会計年度から適用し、税効果関係注記を変更しております。

税効果関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(評価性引当額の合計額を除く。)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前連結会計年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(資産除去債務関係)

資産除去債務の負債及び純資産に占める割合が僅少であるため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

賃貸等不動産の総資産に占める割合が僅少であるため、記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当行グループは、銀行業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1 サービスごとの情報

当行グループは、銀行業として単一のサービスを提供しているため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1 サービスごとの情報

当行グループは、銀行業として単一のサービスを提供しているため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主(会社等の場合に限る。)等

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
親会社	株式会社 ふくおか フィナンシャル グループ	福岡市 中央区	124,799	子会社の経営管理業務	被所有 直接 100.0	経営管理等 役員の兼任	融資取引	11,500	貸出金	126,500
							貸出金利息	356	前受収益	64
							連結納税	11,065	未払金	11,065

取引条件及び取引条件の決定方針等

一般の取引と同様の条件で行っております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
親会社	株式会社 ふくおか フィナンシャル グループ	福岡市 中央区	124,799	子会社の経営管理業務	被所有 直接 100.0	経営管理等 役員の兼任	融資取引	3,000	貸出金	129,500
							貸出金利息	396	前受収益	68
							連結納税	11,177	未払金	11,177

取引条件及び取引条件の決定方針等

一般の取引と同様の条件で行っております。

(イ) 連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

関連当事者との取引について記載すべき重要なものではありません。

(ウ) 連結財務諸表提出会社と同一の親会社をもつ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
親会社の子会社	株式会社 親和銀行	佐世保市	36,878	銀行業		金銭貸借関係	資金の貸付	200,000	コールローン	200,000
							コールローン利息	33	未収収益	0
親会社の子会社	株式会社 熊本銀行	熊本市 中央区	33,847	銀行業		金銭貸借関係	資金の貸付	200,000	コールローン	200,000
							コールローン利息	33	未収収益	0

取引条件及び取引条件の決定方針等

一般の取引と同様の条件で行っております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
親会社の子会社	株式会社親和銀行	佐世保市	36,878	銀行業		金銭貸借関係	資金の貸付	180,000	コールローン(注)1	380,000
							コールローン利息	199	未収収益	2
親会社の子会社	株式会社熊本銀行	熊本市中央区	33,847	銀行業		金銭貸借関係	資金の貸付	250,000	コールローン(注)2	450,000
							コールローン利息	230	未収収益	2

(注) 1 コールローンに対する担保として、有価証券71,707百万円を受け入れております。

2 コールローンに対する担保として、有価証券27,717百万円を受け入れております。

取引条件及び取引条件の決定方針等

一般の取引と同様の条件で行っております。

(工)連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る。)等

関連当事者との取引について記載すべき重要なものではありません。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

(ア)連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主(会社等の場合に限る。)等

関連当事者との取引について記載すべき重要なものではありません。

(イ)連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

関連当事者との取引について記載すべき重要なものではありません。

(ウ)連結財務諸表提出会社と同一の親会社をもつ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等  
前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
親会社の子会社	株式会社親和銀行	佐世保市	36,878	銀行業		保証関係	ふくぎん保証株式会社による住宅ローン債権等に関する保証	358,255	支払承諾見返	358,255
親会社の子会社	株式会社熊本銀行	熊本市中央区	33,847	銀行業		保証関係	ふくぎん保証株式会社による住宅ローン債権等に関する保証	307,365	支払承諾見返	307,365

取引条件及び取引条件の決定方針等

一般の取引と同様の条件で行っております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金(百万円)	事業の内容又は職業	議決権等の所有(被所有)割合(%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額(百万円)	科目	期末残高(百万円)
親会社の子会社	株式会社親和銀行	佐世保市	36,878	銀行業		保証関係	ふくぎん保証株式会社による住宅ローン債権等に関する保証	360,968	支払承諾見返	360,968
親会社の子会社	株式会社熊本銀行	熊本市中央区	33,847	銀行業		保証関係	ふくぎん保証株式会社による住宅ローン債権等に関する保証	336,244	支払承諾見返	336,244

取引条件及び取引条件の決定方針等

一般の取引と同様の条件で行っております。

(工)連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る。)等

関連当事者との取引について記載すべき重要なものではありません。

2 親会社又は重要な関連会社に関する注記

(1) 親会社情報

株式会社ふくおかフィナンシャルグループ(東京証券取引所、福岡証券取引所に上場)

(2) 重要な関連会社の要約財務情報

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	947円27銭	946円67銭
1株当たり当期純利益	59円52銭	72円51銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益		

(注) 1 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり当期純利益			
親会社株主に帰属する当期純利益	百万円	44,044	53,655
普通株主に帰属しない金額	百万円		
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益	百万円	44,044	53,655
普通株式の期中平均株式数	千株	739,952	739,952

2 なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないので記載しておりません。

3 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
純資産の部の合計額	百万円	700,941	700,493
純資産の部の合計額から控除する金額	百万円		
うち新株予約権	百万円		
うち非支配株主持分	百万円		
普通株式に係る期末の純資産額	百万円	700,941	700,493
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数	千株	739,952	739,952

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
当行	第6回期限前償還条項付 無担保社債(劣後特約付)	2011年 12月22日	10,000	10,000	(注1)	なし	2026年 12月22日
合計			10,000	10,000			

- (注) 1 第6回期限前償還条項付無担保社債の利率は、2011年12月23日から2021年12月22日まで年1.95%、2021年12月22日の翌日以降は、ロンドン銀行間市場における6ヶ月ユーロ円LIBOR+2.42%。  
2 連結決算日後5年以内における償還予定額はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
借入金	1,281,482	1,486,134	0.13	
再割引手形				
借入金	1,281,482	1,486,134	0.13	2019年4月～ 2027年10月
1年以内に返済予定のリース債務	763	724		
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	1,591	1,367		2020年4月～ 2028年7月

- (注) 1 「平均利率」は、期末日現在の「利率」及び「当期末残高」により算出(加重平均)しております。  
2 リース債務の平均利率は、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。  
3 借入金及びリース債務の連結決算日後5年以内における返済額は次のとおりであります。

	1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
借入金(百万円)	2,783		14	20	
リース債務 (百万円)	724	556	377	116	82

銀行業は、預金の受入れ、コール・手形市場からの資金の調達・運用等を営業活動として行っているため、借入金等明細表については連結貸借対照表中「負債の部」の「借入金」及び「その他負債」中のリース債務の内訳を記載しております。なお、上記返済額は、日本銀行からの借入金を除いて計上しております。

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度の期首及び期末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度の期首及び期末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2) 【その他】

該当事項はありません。

## 2 【財務諸表等】

## (1) 【財務諸表】

## 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
<b>資産の部</b>		
現金預け金	8 3,468,626	8 3,516,485
現金	89,891	92,969
預け金	3,378,735	3,423,515
コールローン	409,661	838,769
買入金銭債権	34,811	32,148
特定取引資産	943	743
商品有価証券	943	743
金銭の信託	1,013	990
有価証券	1, 2, 8, 9 2,394,706	1, 8, 9 2,149,257
国債	1,296,439	1,008,712
地方債	61,697	54,758
社債	13 486,424	13 442,550
株式	170,698	142,116
その他の証券	379,445	501,118
貸出金	3, 4, 5, 6, 8, 9 9,512,046	3, 4, 5, 6, 8, 9 9,897,843
割引手形	7 35,972	7 34,264
手形貸付	298,493	298,899
証書貸付	8,234,436	8,566,107
当座貸越	943,143	998,572
外国為替	5,094	5,267
外国他店預け	3,929	3,881
買入外国為替	7 155	7 414
取立外国為替	1,009	971
その他資産	144,485	146,239
前払費用	290	166
未収収益	11,538	11,128
先物取引差入証拠金	156	132
先物取引差金勘定	46	0
金融派生商品	23,157	16,859
金融商品等差入担保金	99,749	107,477
その他の資産	1, 8 9,546	1, 8 10,474
有形固定資産	10 152,572	10 151,409
建物	41,907	42,103
土地	102,496	102,617
リース資産	2,302	1,991
建設仮勘定	2,022	1,250
その他の有形固定資産	3,841	3,446
無形固定資産	10,806	11,334
ソフトウェア	8,355	7,389
その他の無形固定資産	2,451	3,945
前払年金費用	12,821	10,016
支払承諾見返	31,143	33,760
貸倒引当金	82,550	83,762
<b>資産の部合計</b>	<b>16,096,182</b>	<b>16,710,503</b>

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
<b>負債の部</b>		
預金	8 10,183,104	8 10,447,178
当座預金	653,465	516,901
普通預金	5,984,933	6,577,453
貯蓄預金	81,298	85,455
通知預金	23,700	27,222
定期預金	3,076,607	2,965,769
定期積金	6	6
その他の預金	363,091	274,368
譲渡性預金	225,481	210,386
コールマネー	1,321,797	1,870,492
売現先勘定	8 105,625	8 1,241,589
債券貸借取引受入担保金	8 2,140,301	8 618,007
特定取引負債	0	0
商品有価証券派生商品	0	0
借入金	8 1,278,824	8 1,483,409
借入金	11 1,278,824	11 1,483,409
外国為替	1,059	1,093
売渡外国為替	1,032	941
未払外国為替	26	152
社債	12 10,000	12 10,000
その他負債	95,019	93,981
未決済為替借	19	229
未払法人税等	3,383	3,232
未払費用	6,202	6,234
前受収益	1,710	1,714
従業員預り金	1,636	1,545
給付補填備金	0	0
金融派生商品	36,169	42,140
金融商品等受入担保金	6,421	1,858
リース債務	2,288	1,985
資産除去債務	110	112
その他の負債	37,077	34,927
睡眠預金払戻損失引当金	4,023	3,494
その他の偶発損失引当金	7	3
繰延税金負債	12,178	4,095
再評価に係る繰延税金負債	23,020	22,989
支払承諾	31,143	33,760
<b>負債の部合計</b>	<b>15,431,587</b>	<b>16,040,483</b>

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
<b>純資産の部</b>		
資本金	82,329	82,329
資本剰余金	60,480	60,480
資本準備金	60,479	60,479
その他資本剰余金	1	1
利益剰余金	374,363	404,394
利益準備金	46,520	46,520
その他利益剰余金	327,843	357,873
固定資産圧縮積立金	409	392
別途積立金	144,220	144,220
繰越利益剰余金	183,213	213,261
株主資本合計	517,174	547,204
その他有価証券評価差額金	108,315	90,706
繰延ヘッジ損益	12,527	19,451
土地再評価差額金	51,631	51,560
評価・換算差額等合計	147,419	122,815
純資産の部合計	664,594	670,020
負債及び純資産の部合計	16,096,182	16,710,503

## 【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日)	当事業年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月31日)
経常収益	172,045	182,749
資金運用収益	128,922	136,727
貸出金利息	99,897	103,207
有価証券利息配当金	25,584	27,483
コールローン利息	20	284
買現先利息	0	0
債券貸借取引受入利息	0	0
預け金利息	2	1
金利スワップ受入利息	207	756
その他の受入利息	3,209	5,563
信託報酬	0	0
役務取引等収益	36,612	35,699
受入為替手数料	10,235	10,033
その他の役務収益	26,376	25,666
特定取引収益	6	6
商品有価証券収益	6	6
その他業務収益	1,398	2,939
外国為替売買益	809	1,549
国債等債券売却益	3	1,046
金融派生商品収益	585	343
その他の業務収益	0	0
その他経常収益	5,104	7,375
償却債権取立益	1,066	369
株式等売却益	828	5,149
金銭の信託運用益	50	
その他の経常収益	1 3,158	1 1,855
経常費用	115,036	113,986
資金調達費用	18,031	22,059
預金利息	3,953	4,056
譲渡性預金利息	82	46
コールマネー利息	59	468
売現先利息	1,904	1,731
債券貸借取引支払利息	3,055	4,854
借入金利息	857	1,616
社債利息	195	195
金利スワップ支払利息	7,515	9,597
その他の支払利息	408	428
役務取引等費用	20,013	20,425
支払為替手数料	4,745	4,653
その他の役務費用	15,268	15,771
その他業務費用	1,625	11
国債等債券売却損	904	11
国債等債券償還損	720	
営業経費	70,502	66,608

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月 31日)	当事業年度 (自 2018年 4月 1日 至 2019年 3月 31日)
その他経常費用	4,863	4,882
貸倒引当金繰入額	2,032	1,914
株式等売却損	66	0
株式等償却	38	68
金銭の信託運用損		12
その他の経常費用	<sup>2</sup> 2,726	<sup>2</sup> 2,886
経常利益	57,009	68,762
特別損失	529	265
固定資産処分損	529	265
税引前当期純利益	56,480	68,497
法人税、住民税及び事業税	15,514	16,192
法人税等調整額	536	1,996
法人税等合計	16,051	18,189
当期純利益	40,428	50,308

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2017年 4月 1日 至 2018年 3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他 利益剰余金	
					固定資産 圧縮積立金	別途積立金	
当期首残高	82,329	60,479	1	60,480	46,520	426	144,220
当期変動額							
剰余金の配当							
固定資産圧縮積立金の取崩						17	
当期純利益							
土地再評価差額金の取崩							
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)							
当期変動額合計						17	
当期末残高	82,329	60,479	1	60,480	46,520	409	144,220

	株主資本			評価・換算差額等				純資産合計
	利益剰余金		株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
	その他 利益剰余金 繰越利益 剰余金	利益剰余金 合計						
当期首残高	160,582	351,750	494,560	93,237	12,660	51,649	132,226	626,787
当期変動額								
剰余金の配当	17,832	17,832	17,832					17,832
固定資産圧縮積立金の取崩	17							
当期純利益	40,428	40,428	40,428					40,428
土地再評価差額金の取崩	17	17	17					17
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)				15,078	132	17	15,193	15,193
当期変動額合計	22,630	22,613	22,613	15,078	132	17	15,193	37,806
当期末残高	183,213	374,363	517,174	108,315	12,527	51,631	147,419	664,594

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本						
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他 利益剰余金	
						固定資産 圧縮積立金	別途積立金
当期首残高	82,329	60,479	1	60,480	46,520	409	144,220
当期変動額							
剰余金の配当							
固定資産圧縮積立金の取崩						17	
当期純利益							
土地再評価差額金の取崩							
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)							
当期変動額合計						17	
当期末残高	82,329	60,479	1	60,480	46,520	392	144,220

	株主資本			評価・換算差額等				純資産合計
	利益剰余金		株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	評価・換算 差額等合計	
	その他 利益剰余金	利益剰余金 合計						
	繰越利益 剰余金							
当期首残高	183,213	374,363	517,174	108,315	12,527	51,631	147,419	664,594
当期変動額								
剰余金の配当	20,348	20,348	20,348					20,348
固定資産圧縮積立金の取崩	17							
当期純利益	50,308	50,308	50,308					50,308
土地再評価差額金の取崩	70	70	70					70
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)				17,609	6,924	70	24,604	24,604
当期変動額合計	30,047	30,030	30,030	17,609	6,924	70	24,604	5,426
当期末残高	213,261	404,394	547,204	90,706	19,451	51,560	122,815	670,020

## 【注記事項】

### (重要な会計方針)

#### 1 特定取引資産・負債の評価基準及び収益・費用の計上基準

金利、通貨の価格、金融商品市場における相場その他の指標に係る短期的な変動、市場間の格差等を利用して利益を得る等の目的(以下、「特定取引目的」という。)の取引については、取引の約定時点を基準とし、貸借対照表上「特定取引資産」及び「特定取引負債」に計上するとともに、当該取引からの損益を損益計算書上「特定取引収益」及び「特定取引費用」に計上しております。

特定取引資産及び特定取引負債の評価は、有価証券及び金銭債権等については決算日の時価により、スワップ・先物・オプション取引等の派生商品については決算日において決済したものとみなした額により行っております。

また、特定取引収益及び特定取引費用の損益計上は、当事業年度中の受払利息等に、有価証券及び金銭債権等については前事業年度末と当事業年度末における評価損益の増減額を、派生商品については前事業年度末と当事業年度末におけるみなし決済からの損益相当額の増減額を加えております。

#### 2 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による原価法又は償却原価法(定額法)、子会社株式及び関連会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については原則として決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

(2) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。

#### 3 デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引(特定取引目的の取引を除く)の評価は、時価法により行っております。

#### 4 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

建物については、定額法、その他の有形固定資産については、定率法を採用しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建 物：3年～50年

その他：2年～20年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」中のリース資産は、原則としてリース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。

#### 5 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建資産・負債については、決算日の為替相場による円換算額を付しております。

#### 6 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下、「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下、「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(以下、「破綻懸念先」という。)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

破綻懸念先及び貸出条件緩和債権等を有する債務者で与信額が一定額以上の大口債務者のうち、債権の元本の回収及び利息の受取りに係るキャッシュ・フローを合理的に見積もることができる債権については、当該キャッシュ・フローを貸出条件緩和実施前の約定利子率で割引いた金額と債権の帳簿価額との差額を貸倒引当金とする方法(キャッシュ・フロー見積法)により計上しております。

上記以外の債権については、過去の一定期間におけるデフォルト件数から算出したデフォルト率等に基づき計上しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しておりましたが、2018年事業年度から直接減額を行っておりません。当事業年度末における2017年事業年度末までの当該直接減額した額の残高は4,541百万円(前事業年度末は8,099百万円)であります。

## (2) 退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、退職給付債務の算定に当たり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。なお、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用:発生時に全額を処理

数理計算上の差異:各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌事業年度から損益処理

## (3) 睡眠預金払戻損失引当金

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り、必要と認められる額を計上しております。

## (4) その他の偶発損失引当金

その他の偶発損失引当金は、業務上発生する可能性のある偶発損失を見積り、必要と認められる額を計上しております。

## 7 ヘッジ会計の方法

### (1) 金利リスク・ヘッジ

金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日)に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の(残存)期間毎にグルーピングのうえ特定し評価しております。また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。

### (2) 為替変動リスク・ヘッジ

外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 2002年7月29日)に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

なお、一部の資産・負債については、金利スワップの特例処理を行っております。

## 8 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

### (1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結財務諸表における会計処理の方法と異なっております。

### (2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税(以下、消費税等という。)の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当事業年度の費用に計上しております。

### (3) 連結納税制度の適用

株式会社ふくおかフィナンシャルグループを連結納税親会社とする連結納税主体の連結納税子会社として、連結納税制度を適用しております。

(貸借対照表関係)

1 関係会社の株式又は出資金の総額

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
株式	9,493百万円	9,593百万円
出資金	2,021百万円	3,440百万円

2 無担保の消費貸借契約(債券貸借取引)により貸し付けている有価証券が、「有価証券」中の国債に含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
	33,692百万円	百万円

無担保の消費貸借契約(債券貸借取引)により借り入れている有価証券のうち、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有する有価証券は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
(再)担保に差し入れている有価証券	755,076百万円	621,954百万円
当事業年度末に当該処分をせずに所有している有価証券	3,494百万円	2,320百万円

3 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
破綻先債権額	2,831百万円	4,635百万円
延滞債権額	113,494百万円	110,558百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下、「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(1965年政令第97号)第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

4 貸出金のうち3ヵ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
3ヵ月以上延滞債権額	77百万円	737百万円

なお、3ヵ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

5 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
貸出条件緩和債権額	37,861百万円	41,131百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3ヵ月以上延滞債権に該当しないものであります。

6 破綻先債権額、延滞債権額、3ヵ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
合計額	154,265百万円	157,063百万円

なお、上記3から6に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

- 7 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替等は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
36,128百万円	34,678百万円

- 8 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
担保に供している資産		
現金預け金	2,530百万円	百万円
有価証券	2,676,475	2,400,290
貸出金	1,242,528	1,571,716
その他の資産	108	
計	3,921,642	3,972,007

担保資産に対応する債務

預金	47,497	48,874
売現先勘定	105,625	1,241,589
債券貸借取引受入担保金	2,140,301	618,007
借入金	1,258,052	1,482,813

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
現金預け金	百万円	2,930百万円
有価証券	31,390百万円	百万円
その他の資産	12百万円	219百万円

子会社、関連会社の借入金等にかかる担保提供資産はありません。

また、その他の資産には、保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
保証金	1,387百万円	1,384百万円

なお、手形の再割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日)に基づき金融取引として処理しておりますが、これにより引き渡した商業手形及び買入外国為替等はありません。

- 9 当座貸越契約及び貸付金等に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
融資未実行残高	3,227,130百万円	3,221,156百万円
うち原契約期間が1年以内のもの (又は任意の時期に無条件で取消可能なもの)	3,069,228百万円	3,025,006百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

10 有形固定資産の圧縮記帳額

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
圧縮記帳額 (当該事業年度の圧縮記帳額)	5,509百万円 (百万円)	5,454百万円 (百万円)

11 借入金には、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金が含まれておりま  
す。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
劣後特約付借入金	20,000百万円	百万円

12 社債には、期限前償還条項付無担保社債(劣後特約付)が含まれております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
期限前償還条項付無担保社債 (劣後特約付)	10,000百万円	10,000百万円

13 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
	10,055百万円	9,928百万円

(損益計算書関係)

1 その他の経常収益には、次のものを含んでおります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
最終取引日以降長期間移動のない預金 等に係る収益計上額	2,488百万円	1,093百万円

2 その他の経常費用には、次のものを含んでおります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
睡眠預金払戻損失引当金繰入額	491百万円	1,077百万円

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

子会社株式及び関連会社株式は、全て市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められるものであ  
ります。その貸借対照表計上額は、次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
子会社株式	11,490	13,009
関連会社株式		
合計	11,490	13,009

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	24,475百万円	23,891百万円
退職給付引当金	3,726	3,242
有価証券償却	5,867	5,526
減価償却	1,957	1,911
繰延ヘッジ損益	5,471	8,496
その他	4,404	3,774
繰延税金資産小計	45,902	46,842
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額		6,247
評価性引当額小計	6,895	6,247
繰延税金資産合計	39,007	40,594
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	45,952	38,864
退職給付信託設定益	2,653	2,394
退職給付信託返還有価証券	2,131	2,978
固定資産圧縮積立金	402	402
その他	46	48
繰延税金負債合計	51,185	44,689
繰延税金負債の純額	12,178百万円	4,095百万円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.6%	30.4%
(調整)		
評価性引当額の増減	0.6	0.9
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.4	0.3
住民税均等割等	0.2	0.2
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	3.2	3.0
税率変更に伴う影響	0.3	
その他	0.5	0.5
税効果会計適用後の法人税等の負担率	28.4%	26.5%

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日。以下、「税効果会計基準一部改正」という。)を当事業年度から適用し、税効果関係注記を変更しております。

税効果関係注記において、税効果会計基準一部改正第4項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(1)(評価性引当額の合計額を除く。)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前事業年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は償却累 計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末 残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	99,420	2,573	25	101,968	59,864	2,374	42,103
土地	102,496 (74,097)	120 ( )	( )	102,617 (74,097)			102,617
リース資産	5,118	441	312	5,248	3,256	751	1,991
建設仮勘定	2,022	2,151	2,923	1,250			1,250
その他の有形固定資産	15,881 (554)	313 ( )	326 (101) [ ]	15,869 (453)	12,422	588	3,446
有形固定資産計	224,941 (74,652)	5,600 ( )	3,587 (101) [ ]	226,954 (74,550)	75,544	3,714	151,409
無形固定資産							
ソフトウェア	47,185	2,262	2	49,445	42,056	3,226	7,389
その他の無形固定資産	2,741	3,117	1,623	4,235	290	0	3,945
無形固定資産計	49,927	5,380	1,625	53,681	42,346	3,226	11,334

(注) 1. 土地及びその他の有形固定資産における( )内は土地の再評価に関する法律(1998年3月31日公布  
法律第34号)の規定により土地の再評価を行った差額(内書き)であります。

2. 当期減少額欄における[ ]内は減損損失の計上額[内書き]であります。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	82,550	83,762	702	81,847	83,762
一般貸倒引当金	33,935	33,763		33,935	33,763
個別貸倒引当金	48,614	49,999	702	47,911	49,999
うち非居住者向け債権分	1,353	1,244		1,353	1,244
投資損失引当金		66			66
睡眠預金払戻損失引当金	4,023	3,494	1,606	2,417	3,494
その他の偶発損失引当金	7	3		7	3
計	86,582	87,327	2,308	84,273	87,327

(注) 当期減少額(その他)欄に記載の減少額はそれぞれ次の理由によるものであります。

- 一般貸倒引当金・・・洗替等による取崩額
- 個別貸倒引当金・・・洗替等による取崩額
- うち非居住者向け債権分・・・洗替等による取崩額
- 睡眠預金払戻損失引当金・・・洗替等による取崩額
- その他の偶発損失引当金・・・洗替等による取崩額

未払法人税等

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
未払法人税等	3,383	6,198	6,349		3,232
未払法人税等	1,166	2,058	2,137		1,086
未払事業税	2,217	4,140	4,211		2,145

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【信託財産残高表】

科目	資産			
	前事業年度 (2018年3月31日)		当事業年度 (2019年3月31日)	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
有価証券	129	41.38	129	42.38
現金預け金	183	58.62	176	57.62
合計	313	100.00	305	100.00

科目	負債			
	前事業年度 (2018年3月31日)		当事業年度 (2019年3月31日)	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
金銭信託	313	100.00	305	100.00
合計	313	100.00	305	100.00

(注) 元本補てん契約のある信託については、前事業年度末及び当事業年度末ともに取扱残高はありません。

(4) 【その他】

該当事項はありません。

## 第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	
株券の種類	株券の発行はしていません。
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	1,000株
株式の名義書換え 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 名義書換手数料 新券交付手数料	福岡市中央区天神二丁目14番2号 日本証券代行株式会社福岡支店 日本証券代行株式会社 日本証券代行株式会社本支店 無料
単元未満株式の買取り・買増し 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取・買増手数料	福岡市中央区天神二丁目14番2号 日本証券代行株式会社福岡支店 日本証券代行株式会社 日本証券代行株式会社本支店 無料
公告掲載方法	電子公告により行ないます。ただし、電子公告によることができない事故その他やむを得ない事由が生じたときは、日本経済新聞に掲載致します。 公告掲載URL <a href="https://www.fukuokabank.co.jp/">https://www.fukuokabank.co.jp/</a>
株主に対する特典	ありません

(注)当行定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、会社法第166条第1項の規定による請求をする権利、株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利並びに単元未満株式の売渡請求をする権利以外の権利を有していません。

## 第7 【提出会社の参考情報】

### 1 【提出会社の親会社等の情報】

当行は、上場会社でないため金融商品取引法第24条の7第1項の適用がありません。

### 2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

#### (1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度	期間	提出日	提出先
第107期	自 2017年4月1日 至 2018年3月31日	2018年6月28日	福岡財務支局長

#### (2) 半期報告書及び確認書

事業年度	期間	提出日	提出先
第108期中	自 2018年4月1日 至 2018年9月30日	2018年11月22日	福岡財務支局長

#### (3) 臨時報告書

提出理由	提出日	提出先
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号(代表取締役の異動)	2019年3月25日	福岡財務支局長

## 第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

## 独立監査人の監査報告書

2019年6月26日

株式会社福岡銀行  
取締役会 御中

### EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	三	浦	昇
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	藤	井	義博
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	永	里	剛

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社福岡銀行の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

#### 連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社福岡銀行及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

- 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
- 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

## 独立監査人の監査報告書

2019年6月26日

株式会社福岡銀行  
取締役会 御中

### EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	三	浦	昇
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	藤	井	義博
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	永	里	剛

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社福岡銀行の2018年4月1日から2019年3月31日までの第108期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

#### 財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社福岡銀行の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

- 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
- 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。